

て下し視るが如し而も外には仁義禮智信を揚げて下品の

(十、因果抄)

九 善心を起し阿修羅道を行ずるなりと  
儒家の孝養は今生にかぎる未來の父母を扶けざれば外家の  
の聖賢は有名無實なり外道は過未をしれども父母を扶く  
る道なし佛道こそ父母の後世を扶くれば聖賢の名はある

(三、開目抄)

十 べけれ  
佛法已前に五常を以て國を治むるは遠く佛誓を以て國を  
治むるなり禮儀を破るは佛の出し給へる五戒を破るなり

(三十三、毘羅對治抄)

第三章 權實對

一 世尊の法は久ふして後要ず當に眞實を説くべし(方便品)  
是れ究竟の法とやせん是れ所行の道とやせん佛口所生の  
子は合掌し瞻仰し待ち上る (方便品)

三 合掌し敬心を以て具足の道を聞かんと欲す (方便品)

四 諸佛如來は但菩薩を教化し給ふことを聞かず知らずんば  
是れ佛弟子にあらず阿羅漢にあらず辟支佛にあらず

(方便品)

五 十方佛土の中には唯一乘の法のみあり二なく亦三なし佛  
の方便説を除く但假の名字を以て衆生を引導す(方便品)  
六 實處近に在り向きの大城は我化作する所にして止息せん

(化城品)

七 若し未だ聞かず未だ解せず未だ是の法華經を修習するこ  
 と能はずんば當に知るべし是の人は阿耨多羅三藐三菩提  
 を去ること尙遠し若し聞くことを得て解して思惟し修習  
 せば必ず知んぬ阿耨多羅三藐三菩提に近づくを得たるこ  
 とを

(法師品)

八 藥王今汝に告ぐ我所説の諸經あり而も此の經の中に於て  
 法華最も第一なり爾の時に佛復藥王菩薩に告げ給はく我  
 所説の經典無量千萬億にして已に説き今説き當に説かん  
 而も其の中に於て此の法華經最も爲れ難信難解なり

(法師品)

九 此の法華經は諸佛如來の秘密の藏なり諸教の中に於て最

十 譬は一切の川流江河の諸水の中に海これ第一なるが如く

(安樂行品)

此の法華經も亦復是の如し諸の如來の所説の經の中に於  
 て最もこれ深大なり

(藥王品)

十一 又日天子の能く諸の闇を除くが如く此の經も亦復是の如  
 し能く一切不善の闇を破す

(全上)

十二 佛はこれ諸法の王なるが如く此の經も亦復是の如し諸經の  
 中の王なり

(全上)

十三 佛は了義經によりて不了義經によらざれと説き妙樂大師  
 は縦ひ經有つて諸經之王と云ふとも己今當説最爲第一と  
 云はずんば兼但對帶其義知ぬ可しと釋し給へり此釋の心  
 は設ひ經ありて諸經の王と云とも前に説つる經にも後に

説んずる經にも、此經はまされりと云はずは方便の經とし  
れと云ふ釋也。されば爾前の經の習として、今説く經より後  
に又經を説べき由を云はざる也。唯法華經計こそ最後の極  
説なるが故に、己今當の中に此經獨り勝れたりと説れて候  
へ

(持法華問答抄)

十四 問ふて曰く密嚴經に曰く、一切の經中に勝れたりと大雲經  
に云く、諸經の轉輪聖王なりと、金光明經に云く諸經の中  
王なりと、此等の文を見るに、諸大乘經の常の習なり、何ぞ一  
文を瞻てのみ無量義經は四十餘年の諸經に勝ると云ふや、  
答へて云く、教主釋尊若し諸經に於て互に勝劣を説かば大  
小乗の差別權實の不同あるべからず、若し實に差別なきに  
互に差別淺深等を説かば、淨論の根源惡業起罪の因縁なり、

爾前の諸經は第一に縁に隨つて不定なり、或は小乗の諸經  
に對して第一、或は報身の壽を説く諸經の第一、或は俗諦眞  
諦中諦等を説く、第一なり、一切の第一に非ず、今の無量義經  
の如きは四十餘年の諸經に對して第一なり(十守護國家論)  
十五 法華經第一卷方便品に云く、世尊の法は久ふして後要らず  
當に眞實を説くべし、又云く正直に方便を捨て、但無上道  
を説く云、第五卷に云く、唯譬中の明珠、又云く獨り王の頂  
上に此の一粒有り、又云く彼の強力の王の久く護れる明珠  
を今乃ち之を與るか如し、等云文の心は、日本國に一切經  
わたれり七千三百九十九卷也、彼の彼の經經は、皆法華經の眷  
屬也、例せば日本國の男女の數四十九億九萬四千八百二十  
八人候へ共、皆一人の國王の家人たるが如し、一切經の心は、

愚癡の女人なんどの唯一時に心うべき様候たとへば大塔をくみ候には先づ材木より外に足代と申て多の小木を集め一丈二丈計ゆゑあけ候也かくゆゑあけて材木を以て大塔をくみあげ候つれば返て足代を切捨て大塔は候なり足代と申は一切經也大塔と申は法華經也佛一切經を説給ふ事は法華經を説給はんための足代也正直捨方便と申して法華經を信ずる人は阿彌陀經等の南無阿彌陀佛大日經等の眞言宗阿含經等の律宗の二百五十戒を切すて擲てのち法華經をば持ち候也大塔をくまんがためには足代大切なれども大塔をくみあげぬれば足代を切落す也正直捨方便と申文の心是也

(外上野抄)

十六 古へ金杖の譬へを以て三乗に配して沙汰する事あり譬へ

は金杖を三に打をりて一づゝ三乗の機根に與へて何れも皆金也然れば何ぞ同じ金に於て差別の思ひをなして勝劣を判せんやと譬へられたり是はうち聞く處はさもやと覺ぬたれども悪く學者の心得たる也今云ふ此義は譬へば法華體内の權の金杖を佛三根にあてゝ體外に三度うちふり給へる其の影を機根見付ずして皆眞實の思を成てそれが見に任せたり其の眞實に金杖をおりて三になしたる事あらばこそ今の譬へは合譬とはならぬ佛は金杖を折ずして三度ふり給へるを機根ありて三に折たりと執著し心得たるは返す返す不心得の大邪見也云云三度振たる法華體内の權の功德を體外の三根に配て三度振たるにてこそあれ全く妙體不思議の圓實を振たる事無なり然れば體外の方

の三乗を體内の權體として權の本體に開會し入るれば、本の體内の權とは云はれ、全く體内の圓とは成らざる也、此心にて體内體外の權實を意得辨ふべき者也(十一諸宗問答抄)

十七 守護章に云く、實經の文を會して權の義に順せしむるは、縣の額を州に打ち、牛跡に大海を入るが如し(壇三經教相)

十八 爾前の經經は、萬差なれども東て是を論ずれば、隨佗意と申して衆生の心を説て侍り、故に違する事なし、譬へは水に石をなぐるにあらそふ事無が如し、又種種の説教侍れども、九界の衆生の心を出てず、衆生の心は皆善につけ、惡につけ迷を本とする故に、佛には成らざる歟(十二顯勝法抄)

十九 空拳を擧て、嬰兒をすかすが如く、様様のたばかりを以て、四十餘年が間は、いまだ眞實を顯はさずと、年記をさして、青天に日輪の出、暗夜に満月のかゝるが如く、説き定めさせ給へり(外聖愚問答抄)

二十 此法華經の始に無量義經と申す經ねはします、譬へば大王の行幸の御時、將軍前陣して狼藉をしづむるが如し、其の無量義經に云く、四十餘年未顯眞實等云、此は將軍か大王に敵する者を大弓を以て射はらひ、又太刀を以て切すつるが如し、華嚴經の華嚴宗、阿含經の律僧等、觀經の念佛者等、大日經の眞言師等の者共が、法華經に隨はぬをせめなびかす利劍也、敎宣也(外上野殿母抄)

廿一 玄十には初後佛慧圓頓の義齊しとも釋し、或は玄の二には此妙彼妙、妙義殊ること無しとも釋せられて、華嚴と法華との佛慧は同じ佛慧にて異なること無しと釋せられ候、通教

別教の佛慧も法華と同じと見なして候、何を以て偏に法華勝たりと立られ候や得意候如何答ふ天台の御釋を引かれ候は定めて天台宗にて御坐候らん然るに天台の御釋は教證の二筋を以て六十卷を造られて候、教道は即ち教相の法門にて候、證道は即ち内證の悟の方にて候、只今引かれ候釋共は教證二道の中には何れの文と御意得候て引かれ候や、若教門の御釋にて候へば教相には三種の教相を立て、爾前法華を釋して勝劣を判せられ候、先づ三種の教相と申すは何にて候やと之を尋ぬ可し、若三種の教相と申すは一には根性の融不融の相、二には化導の始終不始終の相、三には師弟の遠近不遠近の相也と答へば、さて只今引かれ候御釋は何れの教相の下にて釋せられ候哉と之を尋ぬ可し、若

根性の融不融の下にて釋せらると答へば、押退して問ふべし、根性の融不融の下には、約教約部とて二の法門あり、何れぞと問ふべし、若し約教の下にて候と答へば、亦問ふべし、亦約教約部に付て與奪の二つの釋候、只今の釋は與の釋なる歟、奪の釋なる歟と之を尋ぬ可し、若し約教約部をも與奪をも辨へずと云ふ者ならば、さては天台の法門は堅固無沙汰に候なり、尤も天台法華の法門は教相を以て諸佛の御本意を宣られたり、若し教相に暗くして、法華の法門を云ふ者は法華經を讀むると雖も、還つて法華の心を死すとて、法華の心を殺すと云ふ事にて候、其上若し餘經を弘むるには、教相を明めざるも、義に於て傷ると無し、若し法華を弘むるに、教相を明めざれば、文義闕くることありと釋せられて、殊更教

相を本として天台の法門は建立せられ候、仰せられ候如く  
次第も無く偏圓をも明めず、邪正をも簡ずして法門を云は  
ん者をば信受せざれと誠められ候(外諸宗問答抄)

廿二

天台の三大部六十卷總じて五大部の章疏の中に約教の時  
は爾前の圓を嫌ふ文これ無し、只約部の時ばかり爾前の圓  
を押ふさねて嫌へり、日本に二義あり、園城寺には智證大師  
の釋より起て爾前の圓を嫌ふと云ふ、山門には嫌ずと云ふ、  
互に文釋あり俱に料簡あり然れども今に事ゆかず、但し予  
が流義には不審晴れて覺え候、其の故は天台大師四教を立  
給ふに四の筋目あり、一には爾前の經に四教を立つ、二には  
法華經と爾前と相對して爾前の圓を法華經の圓に同じ爾  
前三教を嫌へる事これあり、三には爾前の圓をば別教に攝

して前三教を嫌ひ法華の圓をば純圓と立つ、四には爾前の  
圓をば法華に對すれども、但法華經の二妙の中の相待妙に  
同じて絶待妙には之を同せず、此の四の道理を相對して六  
十卷を勘れば狐疑氷解たり、一の證文は且は秘し且は繁  
き故に之を載せず、法華經の本門に於ては爾前の圓と迹門  
の圓とを嫌ふこと不審無きもの也、爾前の圓をば別教に攝  
して約教の時は前の三を鑑となし後の一を妙となすと云  
ふ也(外唱圓抄)

廿三

法華經の功德を阿彌陀經等にあつらへて、西方へ回向し往  
生せんと思は譬ば飛龍が驢馬を乗物とし、師子が野干を憑  
が如し、將又日輪出現の後は衆星の光無く、大雨の盛なる時  
艸露を厭はざるに同じ、故に教大師の云く、白牛を賜ふ尊に

は三車を用ひず、家業を得る夕には何ぞ除糞を須るん故に  
經に曰く正直に方便を捨て、但無上道を説く云云又云く  
日出れば星隠れ巧を見て拙を知ると云云法華出現の後は  
已今當の諸經を捨らるゝ事は勿論也

(廿六下 山抄)

廿四

唐決には、四教有が故に方等部に攝すと云へり、教時義には  
一切智智一味の開會を説が故に法華の攝と云へり、二義の  
中に方等の攝と云は吉義也、所以に一切智智一味の文を以  
て法華の攝と云事甚だ謂なし、彼は法開會の文にして全く  
人開會なし、争か法華の攝と云るべき、法開會の文は方等般  
若にも盛に談ずれども法華に等き事なし、彼の大日經の始  
終を見るに四教の旨具にあり、尤も方等の攝と云ふべし、所  
以に開權顯實の旨有らざれば法華と云まじ、一向小乘三藏

の義無れば阿舍の部とも云ふべからず、般若畢竟空を説か  
ねば般若部とも云ふべからず、大小四教の旨を説く故に方  
等部と云はずんば何れの部とか云ん、又一代五時を離て外  
に佛法ありと云ふべからず、若有らば二佛並出の失あらん、  
又其法を釋迦統領の國土にきたして弘むべからず

(廿五 眞言天台勝劣抄)

廿五

抑大日の三部を密教と云ひ、法華經を顯教と云事、金言の所  
出を知らず、所詮眞言を密と云は是の密は隱密の密歟、微密  
の密歟、物を秘するに二種有り、一には金銀等を藏に籠るは  
微密也、二には疵片輪等を隠すは隱密也、然れば則眞言を密  
と云は隱密也、其の故は始成と説く故に長壽を隠し、二乘を  
隔る故に記小無し、此の二つは教法の心髓文義の綱骨也、微



廿六

密の密は法華也然れば則ち文に云く四の卷法師品に云く  
 藥王此の經は是れ諸佛祕要の藏なりと  
 隨つて涅槃經の第九を見るに法華經を流通して説いて云  
 く是の經世に出ること彼の果實の一切を利益し安樂にす  
 る所多きが如く能く衆生をして佛性を見せしむ法華の中  
 の入千の聲聞記別を授かることを得て大果實を成するが  
 如きは秋收冬藏して更に所作なきが如きなりと  
 (十守護國家論)

第四章 絶對判

一

若し是の深經を聞いて聲聞の法を決了すれば是れ諸經の  
 王なり聞き已つて諦かに思惟せば當に知るべし此の人等

二

は佛の智慧に近づけるなり  
 (法師品)

三

一切の菩薩の阿耨多羅三藐三菩提は皆此の經に屬せり此  
 の經は方便の門を開ひて眞實の相を示す是の法華經は深  
 固幽遠にして人の能く到るなし  
 (法師品)

四

今此の三界は皆是れ我有なり其の中の衆生は悉く是れ吾  
 子なり  
 (譬喻品)

五

佛諸の菩薩摩訶薩衆に告げ給はく止みね善男子汝等が此  
 の經を護持せんことを須ゐず所以は何ん我娑婆世界に自  
 ら六萬恆河沙等の菩薩摩訶薩あり  
 (涌出品)

六

願くば佛未來の爲に演説して開解せしめよ  
 (涌出品)  
 然るに善男子我實に成佛してより已來無量無邊百千萬億  
 那由佗劫なり  
 (壽量品)

七 其の人計の子息多し若は二十乃至百數なり事の縁あるを以て遠く餘國に至りぬ諸の子於後に佗の毒藥を飲み藥發し悶亂して地に宛轉す(巾略)父此の念を作さく此の子戀ひべし毒に中てられて心皆顛倒せり我を見て喜んで救療を求索むと雖も是の如き好き藥を而も肯て服せず我今當に方便を設けて此の藥を服せしむべし即ち是の言を作さく汝等當に知るべし我今衰老して死の時已に至りぬ是の好き良藥を今留めて此に在く汝取つて服すべし差へじと憂ふること勿れ (毒量品)

八 弘の六に云く徧く法華已前の諸經を尋ぬるに實に二乗作佛の文及如來久成を明したる説なし故に知んぬ竝に方便を帶するに由るが故にと (三六凡四聖御書)

九 開未開異れども同じく圓なりと云云是は迹門の意也諸經は五味法華經は五味の主と申す法門は本門の法門也此法門は天台妙樂も粗書せ給て候へども分明ならざる問學者の存知少なし (十三會谷殿御返事)

十 但し妙法蓮華經皆是真實の文を以て迹門に於て爾前の得道を許す故に爾前得道の義ありと云ふは此は是れ迹門を爾前に對して真實と説く歟而も未だ久遠實成を顯はさず是れ則ち彼の未顯真實の分域なり所以に無量義經に大莊嚴等の菩薩の四十餘年の得益を擧げて佛の答へ給ふに未顯真實の言を以てす又涌出品の中に彌勒疑つて云く如來太子たりし時釋の宮を出て伽耶城を去ること遠からず乃至始て四十餘年を過ぐ已上佛答て云はく一切世間の天

人及阿修羅は皆今の釋迦牟尼佛は釋氏の宮を出て、伽耶城を去ること遠からずして三菩提を得たりと謂へり、我れ實に成佛してより以來と已上我實成佛とは壽量品已前を未顯眞實と云ふにあらずや

十一

(三十三法界抄)

爾前迹門にして猶生死を離れ難し、本門壽量品に至つて必ず生死を離るべし

十二

(三藥王品得意抄)

法華本門の觀心の意を以て一代聖教を按ずるに菴羅果を取つて掌中に捧ぐるが如し、所以は何ん迹門の大教起れば、爾前の教亡し、本門の大教起れば、迹門爾前亡し、觀心の大教起れば、本迹爾前共に亡す、此は是れ如來所説の聖教從淺至深して次第に迷を轉ずるなり、然れども如來の説は一人の爲にせず、此の大道を説くに迷情を除かざれば生死を出て

難し

(三十三法界抄)

十三

設ひ法華經をもつて行ふとも驗なし、經は勝れてをはしませども、行者僻見の者なる故也、法華經に又二經あり、所謂迹門と本門となり、本迹の相違は水火天地の遠目也、例せば爾前と法華經との遠目よりも猶相違あり、爾前と迹門とは相違ありといへども、相似の邊も有ぬべし、所説に入教あり、爾前の圓と迹門の圓は相似せり、爾前の佛と迹門の佛は劣應勝應報身法身異れども、始成の邊同きぞかし、今本門と迹門とは教主已に久始のかわりめ、百歳のをきなと一歳の幼子のごとし、弟子又水火也、土の先後いふばかりなし、なを本迹を混合すれば、水火を辨へざる者也、なを佛は分明に説分給ひたれども、佛の御入滅より今に二千餘年が間三國並びに

一閻浮提の内に分明に分たる人なし、但漢土の天台、日本の傳教、此の二人計こそ粗分給て候へども、本門と迹門との大事の圓戒いまだ分明ならず、詮する處は天台と傳教とは内には鑑み給ふといへども、一には時來らず、二には機なし、三には譲られ給はざる故也、今末法に入ぬ、地涌出現して弘通有べき事なり、今末法に入て本門のひろまらせ給ふべきには、小乗權大乘迹門の人人設ひ科なくとも、彼彼の法にては驗有べからず

(廿八 治病抄)

十四 不信は誘法に非ずと申す事、又云く不信者地獄に墮ちずとの事、五の卷に云く疑を生じて信せざらん者は即當に惡道に墮つべし云云、總て御心へ候へ、法華經と爾前と引向ひ勝劣淺深を判ずるに當分誇節の事に三つの様あり、日蓮が法

門は第三の法門也、世間に粗夢の如く一二をば申せども、第一三をば申さず候、第三の法門は天台妙樂傳教も、粗之を示せども未だ事畢ず、所詮末法の今に譲り與へし也、五五百歳は是也

(廿九 富木抄)

十五 爾前の中に於て且く法華の爲に三乘當分の得道を許す、所謂種熟脱の中の熟益の位なり、是は尚迹門の説なり、本門觀心の時は是れ實義に非ず、一往許すのみ、其の實義を論ずれば、如來久遠の本に迷ひ一念三千を知らざれば、永く六道の流轉を出づべからず、故に釋に云く圓乘の外を名けて、外道と爲す文、又た諸の善男子、小法を樂へる、德薄垢重の者と説く、若し爾れば、經釋共に道理必然なり

(卅三 法界抄)

十六 法華經には二乗作佛、久遠實成之れあり、大日經には之れな

し、印眞言と二乗作佛久遠實成とを對論せば、天地雲泥なり、諸經に印眞言を簡ばざるを大日經に之を説いて何の詮かあるべき、二乗若し灰斷の執を改めずんば印眞言も無用なり、一代の聖教に皆二乗永不成佛と簡び隨て大日經にも之を隔つ、皆成佛までこそなからめ、三分が二之を捨て百分が六十餘分得道せずんば佛の大悲何かせん、凡そ理の三千之れ有り、と云はば成佛の上には何の不足か有るべき、成佛に於ては瘧なる佛中風の覺者は有るべからず、之を以て案ずるに、印眞言は規模なき歟、又諸經には始成正覺の旨を談じて三身相即無始の古佛を顯さず、本無今有の失あれば、大日如來は有名無實なり、壽量品に此の旨を顯す、釋尊は天の一月諸佛諸菩薩は萬水に浮べる影なりと見へたり、委細の旨

は且らく之を置く

(十法華眞目勝劣抄)

十七

迹門には但是れ始覺の十界互具を説いて未だ必ずしも本覺本有の十界互具を明さず、故に所化の大衆能化の圓佛皆是れ悉く始覺なり、若し爾らば本無今有の失何ぞ免ることを得んや、當に知るべし、四教の四佛則ち圓佛と成るは且く迹門の所談なり、是故に無始の本佛を知らざれば、無始無終の義缺けて具足せず、又無始色心常住の義なし、但し是法住法位と説くは未來常住にして是れ過去常に非ず、本有の十界互具を顯さざれば、本有の大乗菩薩界なきなり

(十法華抄)

十八

爾前の經即法華經なり、法華經即爾前の經なり、法華經は爾前の經を離れず、爾前の經は法華經を離れず、是を妙法と言

ふ此の覺り起つて後は行者阿含小乘經を讀むも即ち一切の大乗經を讀誦し法華經を讀む人なり故に法華經に云く聲聞の法を決了すれば是れ諸經の王なり文阿含經即法華經と云ふ文なり一佛乘に於て分別して三と説くと文華嚴方等般若即法華經と云ふ文なり若し俗間の經書治世の語言資生の業等を説かんと皆正法に順ずと文一切の外道老子孔子等の經は即法華經と云ふ文なり

(十八因果抄)

十九 法華經は能開念佛は所開なり法華經の行者は一期南無阿彌陀佛と申さずとも南無阿彌陀佛並に十方の諸佛の功德を備へたり譬へば如意寶珠の金銀等の財を備へたるが如し念佛は一期申すとも法華經の功德を具すべからず譬へ

二十 ば三千大千世界に積たる金銀等の財も一つの如意寶珠をばかうべからず設ひ開會をさとれる念佛なりとも猶體内の權なり體内の實に及ばず

(三十章抄)

釋に云く諸水海に入りて同一鹹味諸智如實智に入りて本の名字を失ふと云ふて本の名字一言もよび顯すべからずと釋せられて候也世間の人天台開會の後には相待妙の時嫌はれし處の前四味の諸經の名言を唱るも又諸佛諸菩薩の名言を唱るも皆是れ法華の妙體にて有也大海に入ざる程こそ各別の思ひはなしけん大海に入つて後に見れば日來よしわるしと嫌ひ用ひけるは大僻見にて有けり嫌はる諸河も用ひらる冷水も源は但大海より出る一水にて有けり然れば何れの水とて但大海の水にをいて別々の名言

をよびたるにてこそあれ、各々別々の物と思ふてよぶにこそ科あれ、只大海の一水と思ふて、何れをも心に任せて、有縁に従つて何れも何れも唱へ持ちたるは苦しかるべき事無しとて、念佛をも眞言をも、何れをも心に任せて持ち唱ふる也、今云ふ此の義は與と云ふ時は、さも有ぬべしと覺れども奪と云ふ時は、随分墮地獄の義にて有也。

(十一諸宗同答抄)

### 第三篇 佛陀

#### 第一章 三德

一 如來も亦復是の如し、これ一切衆生の父なり、若し無量億千の衆生の佛教の門を以て、三界の苦怖畏の險道を出て、涅槃の樂を得るを見ては、如來爾の時に便ち是の念を作さく、我れ無量無邊の智慧力無畏等の諸佛の法藏あり、是の諸の衆生は皆是れ我子なり、等しく大乘を與ふべし、人として獨り滅度を得ることあらしめず、皆如來の滅度を以て之を滅度せん。

(譬喩品)

二 我も亦是の如し、衆聖の中の尊なり、世間の父なり、一切衆生は皆是れ吾子なり。

(譬喩品)

三 今此の三界は皆是れ我有なり、其の中の衆生は悉く是れ吾子なり、而も今此の處は諸の患難多し、唯我れ一人のみ能く救護をなす (譬喻品)

四 汝諸人等は皆是れ吾子なり、我は則ち是れ父なり、汝等累劫に衆苦に焼かる、我れ皆濟拔して三界を出てしむ (譬喻品)

五 第十六は我釋迦牟尼佛なり、娑婆國土に於て阿耨多羅三藐三菩提を成せり (化城品)

六 爾の時の所化の無量恆河沙等の衆生は、汝等諸の比丘及び我滅度の後の未來世の中の聲聞の弟子是なり (化城品)

七 但是れ如來の方便の力をもつて一佛乘に於て分別して三と説く、彼の導師の止息せんが爲の故に大城を化作し、既に息み己んぬと知つて、之に告げて寶處は近に在り、此の城は

八 實にあらず、我化作ならくのみと言はんが如し (化城品)  
 阿逸多汝當に知るべし、是の諸の大菩薩は無數劫より來た佛の智慧を修習せり、悉く是れ我所化として大道心を發さしめたり、此等は是れ我子なり (涌出品)

九 我れ常に此の娑婆世界に在つて説法教化す、餘處の百千萬億那由佗阿僧祇の國に於ても衆生を導利す (壽量品)

十 我も亦これ世の父諸の苦患を救ふ者なり (壽量品)

十一 此釋迦如來は三の故ましまして、佗佛にかはらせ給ひて、娑婆世界の一切衆生有縁の佛となり給ふ、一には此の娑婆世界の一切衆生の世尊にておほします、阿彌陀佛は此國の大

王にはあらず、釋迦佛は譬へば我國の主上のごとし、先づ此の國の大王を敬て、後に佗國の王をば敬ふべし、天照太神正



八幡宮等は我が國の本主也、迹化の後神と顯れさせ給ふ、此の神にそむく人此國の主となるべからず、されば天照太神をば、鏡にうつし奉りて内侍所と號す、八幡大菩薩に敕使有て物申しあはせ給ひき、大覺世尊は我等が尊主也、先づ御本尊と定むべし、二には釋迦如來は、娑婆世界の一切衆生の父母也、先づ我が父母を孝し、後に佗人の父母には及ぼすべし、例せば、周の武王は父母の形を木像に造て車にのせて戰の大將と定めて、天威を蒙り、殷の紂王をうつ、舜王は父の盲たるをなげき、涙をながし、手をもてのぞひしかば、本のごとく眼あきにけり、此佛も又是の如く我等衆生の眼をば、開佛知見とは、開き給ひしが、いまだ佗佛は開き給はず、三には此佛は娑婆世界の一切衆生の本師也、此の佛は賢劫第九人壽百

歳の時、中天竺淨飯大王の御子、十九にして出家し、三十にして成道し、五十餘年が間、一代聖教を説き、八十にして御入滅、舍利を留めて、一切衆生を正像末に救ひ給ふ、阿彌陀如來藥師佛、大日等は、佗土の佛にして、此の世界の世尊にてはましまさず

(外善無畏抄)

十二

佛は人天の主、一切衆生の父母也、而も開導の師也、父母なれども、賤き父母は主君の義を兼ねず、主君なれども、父母ならねば、れそろしき邊もあり、父母主君なれども、師匠なる事は無し、諸佛は又世尊にて御坐せば、主君にて御坐せども、娑婆世界に出させ給はざれば、師匠にあらず、又其中衆生悉是吾子とも名乗せ給はず、釋迦佛獨り主師親の三義を兼給へり

(内新勝抄)

十三 釋迦佛は親也師也主也と申す文法華經には候歟と問ふて、  
 有と申さばさて阿彌陀佛は御房の親主師と申す經文は候  
 歟と責て無と云んずる歟若さる經文有と申さば御房の父  
 は二人歟と責給へ又無といはばさては御房は親を捨て何  
 に他人をもてなすろと責給へ其上法華經は他經には似さ  
 せ給はねばこそとて四十餘年等の文を引かるべし即往安  
 樂の文にかゝらばさて先つまり給へる事は承伏歟と責て、  
 それもとて又申すべし

(外彌三耶師書)

十四 又果位を以て之を論ずれば諸佛如來は或は十劫百劫千劫  
 已來の過去の佛なり致生釋尊は既に五百億劫より已來  
 妙覺果滿の佛なり大日如來阿彌陀如來藥師如來等の盡十  
 方諸佛は我等が本師教主釋尊の所從等なり天月の萬水

に浮ぶとは是なり華嚴經の十方臺上の毘盧遮那大日經金  
 剛頂經の兩界の大日如來は寶塔品の多寶如來の左右の脇  
 士なり例せば世の王の兩臣の如し此の多寶如來も壽量品  
 の教主釋尊の所從なり

(法華經取要抄)

十五 寶海梵志一人請取て娑婆世界の人の師と成給ふ寶海梵志  
 の願に云く我れ未來世穢惡土の中に於て當に作佛するこ  
 とを得べし即ち十方淨土より擯出せる衆生を集て我當に  
 之を度すべしと誓ひ給ひき無諍念王と申すは阿彌陀佛也  
 其千の太子は今の觀音勢至普賢文殊等也其寶海梵志と申  
 すは今の釋迦如來也

(外松野抄)

十六 常平等の時は一切諸佛は差別なれども常差別の時各  
 各に十方世界に土をしめて有縁無縁を分ち給ふ大通智勝

佛の十六王子、十方に土をしめて、一一に我が弟子を教ひ給ふ、其中に釋迦如來は此土に當り給ふ、我等衆生も又生を婆世界に受ぬ、いかにも釋迦如來の教化をば、はなるべからず、而といへども、人皆是を知らず、委しく尋ねあきらめば、唯我一人能爲救護と申して、釋迦如來の御手を離るべからず

(十善無長抄)

十七 譬へば我が主の而も智者にて御坐さんを、佗國の王に替て思ひ日本國にすみながら、漢土高麗の王を重んじて、日本國の王にねろそかならんをば、此國の大王をいみじと申す者ならんや、況んや日本國の諸僧は一人もなく、釋迦如來の御弟子として頭べをそり衣を着たり、阿彌陀佛の弟子にはあらぬがかし

(三論三耶御書)

十八 主師親を忘れたるだに、不思議なるに、剩へ親父たる教主釋尊の御誕生御入滅の兩日を奪ひ取て、十五日は阿彌陀佛の日、八日は藥師佛の日と云ふ一佛誕生の兩日を東西二佛の死生の日と成せり、是れ豈に不孝の者に非ず耶、逆路七逆の者に非ず耶、人ごと此の重科は有て而も人ごと、に我身は科なしと思へり、無慚無愧の一闍提の人也、法華經の第二卷には主師親の三の大事を説き給へり、一經の肝心すかし、其經文に云く、今此の三界は皆是れ我有なり、其の中の衆生は悉く是れ吾子なり、而も今此の處は諸の患難多し、唯我一人のみ能く救護を爲す云々、又此の經文に背ん者を説て云く、復教詔すと雖も、而も信受せず、乃至其人命終つて阿鼻獄に入らん等云々

(下 山抄)

十九 我が師釋迦如來は、一代聖尊乃至八萬法藏の説者也、此の婆  
 婆無佛の世の最先に出させ給ふて、一切衆生の眼目を開き  
 給ふ御佛也、東西十方の諸佛菩薩も、皆此の佛の教へなるべ  
 し、譬へは皇帝己前は人父をしらずして畜生の如し、堯王己  
 前は四季を辨へず、牛馬の癡なるに同じかりき、佛世に出さ  
 せ給はざりしには、比丘比丘尼の二衆なく、只男女二人にて  
 候き、今比丘比丘尼の眞言師等大日如來を御本尊と定め釋  
 迦如來を下し、念佛者等が阿彌陀佛を一向に持ちて釋迦如  
 來を抛たるも、教主釋尊の比丘比丘尼也、  
 (十の淨無畏抄)

二十 日本國の第一の不思議には釋迦如來の國に生れて、此佛を  
 すて、一切衆生皆一同に阿彌陀佛につけり、有縁の釋迦を  
 ばすて奉り、無縁の阿彌陀佛をあふぎ奉る、其の上親父釋迦

佛の入滅の日をば阿彌陀佛に付け、又誕生の日をば藥師に  
 成しぬ、八幡大菩薩をば崇る様なれども、又本地を阿彌陀佛  
 に成しぬ、本地垂迹を捨る上に、此の事を申す人をば、かたき  
 とする故に力及ばせ給はずして、此神は天にのぼり給ひぬ  
 る歟、  
 (十六の四條抄)

廿一 涅槃經三十五に云く、我れ處々の經の中に於て説いて言く  
 一人出世すれば多人利益す、一國土の中に二りの轉輪王一  
 世界の中に二りの佛出世すとは是の處りあること無しと、  
 大論九に云く、十方恆河沙の三千大千世界を名けて一佛世  
 界となす、是の中に更に餘佛なし、實に一りの釋迦牟尼佛な  
 りと、記の一に云く、世に二佛なく、國に二主なく、一佛境界に  
 二尊の號なしと、持地論に云く、世に二佛なく、國に二主なし

一 佛境界に二尊の號なしと

(七七眞言見聞)

第二章 顯 本

一

汝等諦かに聽け、如來の秘密神通の力を一切世間の天人及び阿修羅は皆今の釋迦牟尼佛釋氏の宮を出て、伽耶城を去ること遠からず、道場に坐して阿耨多羅三藐三菩提を得給へりと謂へり、然るに善男子、我れ實に成佛してより已來無量無邊百千萬億那由佉劫なり

(壽量品)

二

盡く以て塵となして一塵を一劫とせん、我れ成佛して已來復此に過ぎたること百千萬億那由佉阿僧祇劫なり(全上)

三

如來諸の衆生の小法を樂へる徳薄垢重の者を見て、是の人の爲に我れ少くして出家し阿耨多羅三藐三菩提を得たり

四

と説く、然も我れ實に成佛してより已來久遠なること斯の如し

(壽量品)

是の如く、我れ成佛してより已來甚だ大に久遠にして壽命無量阿僧祇劫なり、常住にして滅せず、諸の善男子、我れ本菩薩の道を行して成せし所の壽命、今猶未だ盡さず、復上の數に倍せり、然るに今實の滅度にあらざれども、而も便ち唱へて當に滅度を取るべしと言ふ、如來是の方便を以て衆生を教化す、所以は何ん、若し佛久しく世に住せば、薄徳の人は善根を種へず、貧窮下賤にして五欲に貪著し、憶想妄見の網の中に入り、なん、若し如來常に在つて滅せずと見れば、便ち憍恣を起して、厭怠を懷き、難遭の想恭敬の心を生ずること能はず、是の故に如來方便を以て説く

(壽量品)

五

六

如來は實に滅せずと雖も而も滅度すと言ふ (壽量品)  
我も亦是の如し成佛して已來無量無邊百千萬億那由他阿僧祇劫なり衆生の爲の故に方便力を以て當に滅度すべし (全上)

七

我れ佛を得てより來た經たる所の諸の劫數無量百千萬億載阿僧祇なり常に法を説いて無數億の衆生を教化して佛

八

爲の故に方便して涅槃を現す而も實には滅度せず(全上)  
我れ時に衆生に語る常に此に在つて滅せず方便方を以て (全上)

九

常に靈鷲山及餘の諸の住處に在り (全上)  
醫の善き方便を以て狂子を治せんが爲の故に實には在れ

ども而も死すと言ふに能く虚妄を説くものなきが如し

十二

其の瓔珞を分つて二分と作して一分は釋迦牟尼佛に奉り (全上)  
一分は多寶佛塔に奉る (普門品)

十三

釋迦牟尼佛をば毗盧遮那遍一切處と名け奉る其の佛の住處をば常寂光と名く常波羅密に攝成せられたる處我波羅

十三

密に安立せられたる處淨波羅密の有相を滅せし處樂波羅密の身心の相に住せざる處有無の諸法の相を見ざる處如寂解脱乃至般若波羅密なり是の色常住の法なり (結經)  
日蓮案じて云く二乗作佛すら猶爾前づよにねぼゆ久遠實成は又なるべくもなき爾前づりなり其の故は爾前法華相對するに猶爾前こはさ上爾前のみならず迹門十四品一向

に爾前に同ず、本門十四品も涌出壽量の二品を除いては皆  
始成を存せり、雙林最後の大般涅槃經四十卷、其の外の法華  
前後の諸大乘經、一字一句もなく、法身の無始無終はとけど  
も、應身報身の顯本はとかれず  
(二開目抄)

十四 諸經には始成正覺の旨を談じて三身相即無始の古佛を顯  
さず、本無今有の失あれば大日如來は有名無實なり、壽量品  
に此の旨を顯す、釋尊は天の一月諸佛菩薩は萬水に浮ぶ  
なり  
(法華經真言勝劣抄)

十五 五百塵點乃至所顯の三身にして無始の古佛なり  
(八觀心本章抄)

十六 其の教主を論ずれば始成正覺の釋尊にあらず所説の法門  
天地の如し  
(八觀心本章抄)

十七 三身の事普賢經に云く佛三種の身は方等より生ず是大法  
印涅槃海を印す此の如き海中より能く三種の佛の清淨の  
身を生ず此三種の身は人天の福田にして應供の中の最な  
り云云三身とは一は法身如來、二は報身如來、三は應身如來  
也此三身如來は一切の諸佛に必ず相具す譬ば月の體は法  
身月の光は報身月の影は應身に譬ふ一の月に三の理あり  
一佛に三身の徳御坐す此の五眼三身の法門は法華經より  
外には全く候はず故に天台大師云く佛三世に於て等しく  
三身あり諸經の中に於て之を秘して傳へず云此の釋の  
中に諸教の中に於てと書れて候は華嚴方等般若のみなら  
ず法華經より外は一切經也之を秘して傳へずと書れて候  
は法華經の壽量品より外は一切經には教主釋尊之を秘し

て説給はずと也

(入金吾釋迦抄)

第三章 應現

- 一 爾の時に諸佛各此の座に於て結跏趺坐し給ふ、是の如く展轉して三千大千世界に徧滿せり、而も釋迦牟尼佛の一方の所分身に於て猶故未だ盡きず、時に釋迦牟尼佛所分身の諸佛を容受せんと欲すが故に、八方に各更に二百萬億那由佉の國を變じて皆清淨ならしめ給ふ (寶塔品)
- 二 或は己身を説き或は他身を説き或は己身を示し或は他身を示し或は己事を示し或は他事を示す (壽量品)
- 三 餘國に衆生の恭敬し信樂する者あれば、我れ復彼の中に於て爲に無上の法を説く (壽量品)

- 四 我等佛滅後に於て世尊分身の所在の國土の滅度の處に於て當に廣く此の經を説くべし (神力品)
- 五 種々の身を現して處々に諸の衆生の爲に是の經典を説く (妙音品)
- 六 其の三昧を現一切色身三昧と名く (妙音品)
- 七 種々の形を以て諸國に遊んで衆生を度脱す (普門品)
- 八 十方の諸の國土に刹として身を現せざること無し(全上)
- 九 南無十方の釋迦牟尼佛の分身の諸佛 (結經)
- 十 十方分身の釋迦牟尼佛一時に雲のごとく集まり廣く妙法を演ぶること妙法華經の如し (結經)
- 十一 釋迦牟尼佛身の毛孔より金色の光を放ち給ふに一々の光の中に百億の化佛あり (結經)



十二

佛壽量品を説て云く一切世間の天人及び阿修羅は皆今の  
 釋迦牟尼佛は釋氏の宮を出て伽耶城を去ること遠からず  
 道場に坐して阿耨多羅三藐三菩提を得たりと謂へり等云  
 云此の經文は始め寂滅道場より終法華經の安樂行品にい  
 たるまでの一切の大菩薩等の所知をあげたるなり然るに  
 善男子我實に成佛してより已來無量無邊百千萬億那由佉  
 劫なり等云云此文は華嚴經の三處の始成正覺阿含經の初  
 成淨名經の始坐佛樹大集經の始十六年大日經の我昔坐道  
 場仁王經の二十九年無量義經の我先道場法華經の方便品  
 の我始坐道場等を一言に大虛妄也とやぶる文なり此過去  
 常顯はるゝ時諸佛皆釋尊の分身なり爾前迹門の時は諸佛  
 釋尊に肩を並べて各修各行の佛かるがゆへに諸佛を本尊

十三

とする者釋迦等を下す今華嚴の臺上方等般若大日經等の  
 諸佛皆釋迦の眷屬なり  
 華嚴經の臺上盧舍那阿含經の丈六の小釋迦方等般若金光  
 明經阿彌陀經大日經等の權佛等は此壽量品の佛の天月の  
 しばらくかけを大小のうつはものに浮べ給を諸宗の智者  
 學匠等は近くは自宗にまどひ遠くは法華經の壽量品を知  
 らず水中の月に實の月のおもひをなして或は入て取んと  
 おもひ或は繩をつけてつなぎとめんとす此を天台大師  
 釋して云く天月を識らずして但池月を觀ると心は爾前迹  
 門に執着する者はその月をしらずして但池の月をのぞ  
 み見るが如くなりと釋せられたり又僧祇律の文に五百の  
 猴山より出て水にやどれる月をみて入てとらんとしける

(三開目抄)

十四 總て一切經の中に、各修各行の三身圓滿の諸佛を集めて、我が分身とはとかれず、これ壽量品の遠序なり、始成四十餘年の釋尊、一劫十劫等已前の諸佛を集めて分身ととかる、さすが平等意趣にもにず、をびただしくをせろかし、又始成の佛が實には無き水月なれば、月はとられずして水に落入て、猿は死しにけり、猿とは今の提婆達多六群比丘等也とあかし給り、一切經の中に此壽量品ましまさずば、天に日月無く、國に大王なく、山海に玉なく、人にたましむ無らんがごとし、されば壽量品なくしては、一切經いたづらごととなるべし、根なき艸ひさしからず、みなもとなき河遠からず、親なき子人にいやしまる、所詮壽量品の肝心南無妙法蓮華經こそ、十方三世の諸佛の母にて御坐候へ、恐恐謹言 (外壽量品得意抄)

十五 ならば所化十方に充滿すべからざれば、分身の徳は備はりたりとも示現してゑきなし、天台云く分身既に多し當に知る成佛久きとを等云、大會のをせろきし意をかゝれたる其上地涌千界の大菩薩、大地より出來せり、釋尊に第一の御弟子とおほしき普賢文殊等にもにるべくもなし、華嚴方等般若法華經の寶塔品に來集せる大菩薩、大日經等の金剛薩埵等の十六の大菩薩なども、此の菩薩に對當すれば、猿猴の群る中に帝釋の來り給がごとし、山人に月卿等のまじはるにことならず、補處の彌勒猶迷惑せり、何に況んや其己下をや、此の千世界の大菩薩の中に四人の大聖まします、所謂上行無邊行淨行安立行なり (三開目抄)

法華經壽量品に云く、或は己身を説き、或は佗身を説く等云

云東方の善徳佛、中央の大日如來、十方の諸佛、過去の七佛三世の諸佛、上行菩薩等、文殊師利舍利弗等、大梵天王、第六天の魔王、釋提桓因王、日月天、明星天、北斗七星、二十八宿、五星、七星、八萬四千の無量の諸星、阿修羅王、天神、地神、王、山神、海神、宅神、里神、一切世間の國主とある人、何れか教主、釋尊ならざるや、天照太神、八幡大菩薩も、其本地は教主、釋尊也、例せば、釋尊は天の一月、諸佛菩薩等は萬水に浮べる影也、釋尊一體を造立する人は、十方世界の諸佛を作り奉る人も、譬は頭を振ばかみもゆるぐ心はたらけば身動く、大風吹ば草木しづかならず、大地動かは大海さはがし、教主、釋尊を動かし奉れば、ゆるがぬ草木や有べき、さはがぬ水や有べき

(三十八日 眼女釋迦抄)

十六

大日經は釋迦の大日と成て説き給へる經也、故に金光明最勝王經の第一には、中央釋迦牟尼と云へり、又金剛頂經の第一にも、中央釋迦牟尼佛と云ふ、大日と釋迦とは一つ中央の佛なる故に、大日經をば釋迦の説とも云べし、大日の説とも云べし、又毗盧遮那と云は、天竺の語、大日と云は、此土の語也、釋迦牟尼を毗盧遮那と名くと云時は、大日は釋迦の異名也、加之舊譯の經には、盧舍那と云ひ、新譯の經には、毗盧遮那と云へり、然間新譯の經の毗盧遮那法身と云は、舊譯の經の盧舍那陀受用身也、故に大日法身と云は、法華經の自受用報身にも及ばず、況や法華經の法身如來と云には、増て及ぶべからず、法華經の自受用身をば、眞言には分絶て知らざる也、隨て華嚴經の新譯には、或は釋迦と稱け、或は毗盧遮那と稱く

と説り、故に大日は只釋迦の異名也、なにしに別の佛とは意  
得べきや (外眞言天台勝劣抄)

十七 大日如來は釋尊の分身也、而るを大日如來は釋尊に勝れた  
りと思ひしは僻見也 (外善無畏抄)

十八 又華嚴經等の諸大乘經の教主、法身報身毗盧遮那盧遮那大  
日如來等をも小佛也と釋し給ふ (外小乘大乘分別抄)

十九 其上大日如來と云は、久遠實成の教主釋尊、四十二年和光同  
塵して其機に應ずる時、三身即一の如來暫く毗盧遮那と示  
せり、是の故に開顯實相の前には釋迦の應化と見ゆたり、爰  
を以て普賢經には釋迦牟尼佛を毗盧遮那遍一切處と名く  
其佛の住處を常寂光と名くと説けり、今法華經は十界互具  
一念三千三諦即是四土不二と談ず、其の上に一代聖教の骨

隨たる二乗作佛、久遠實成は今經に限れり、汝詰る所の大日  
經、金剛頂經等の三部の祕經に此等の大事ありや、善無畏不  
空等此等の大事の法門を盗み取て己が經の眼目とせり、本  
經本論には迹形もなき誑惑なり、能是を改むべし

(外聖恩問答抄)

二十 久遠實成などとは、大日經には思ひもよらず、久遠實成は一  
切の佛の本地譬へば大海は久遠實成魚鳥は千二百餘尊也  
久遠實成なくば千二百餘尊は、うさぐさの根なきがごとく  
夜の露の日輪の出ざる程なるべし (外聖密房御書)  
廿一 四十餘年の中の觀經阿彌陀經悲華經等に法藏比丘等の諸  
菩薩四十八願等を發して、凡夫を九品の淨土へ來迎せんと  
説き給ふ事は、且く法華已前の息め言也、實には彼彼の經の

文の如く十方西方への來迎は有るべからず實と思ふ事無  
 れ釋迦佛の今説給ふが如し實には釋迦多寶十方の諸佛壽  
 量品の肝要たる南無妙法蓮華經の五字を信せしめんが爲  
 めに出し給ふ廣長舌也我等と釋迦佛とは同程の佛と思ふ  
 事なかれ釋迦佛は天月の如く我等は水中の影の月の如し  
 釋迦佛の本土は實には娑婆世界也天月動き給はずば我等  
 も移るべからず此土に居住して法華經の行者を守護し給  
 はん事臣下の主上を仰ぎ奉り父母の一子を愛するが如く  
 ならんとて出し給ふ御舌也  
 (下 山抄)

廿二 法華經第五に云く諸天は晝夜に常に法の爲の故に而も之  
 を衛護す文經文の如くば南無妙法蓮華經と申人をば大梵  
 天帝釋日月四天等晝夜に守護すべしと見たり又第六の

卷に云く或は己身を説き或は他身を説き或は己身を示し  
 或は佗身を示し或は己事を示し或は佗事を示す文觀音尙  
 は三十三身の現じ妙音又卅四身を現じ給ふ教主釋尊何ろ  
 八幡大菩薩と現じ給はざらんや天台云く即ち是れ形を十  
 界に垂れて種々の像を作す等云天竺國を月氏國と申す  
 は佛の出現し給ふべき名也扶桑國をば日本國と申す豈に  
 聖人出給はざらんや月は西より東へ向へり月氏の佛法の  
 東へ移るべき相也日は東より西に入る日本國の佛法の月  
 氏へ還るべき瑞相也月は光明ならず在世は但八箇年也日  
 は光明にして月に勝れたり後五百歳の長き闇を照すべき  
 瑞相也

廿三 佛滅度の後二千二百二十餘年が間月氏漢土日本一閻浮提

の内うちに聖人賢人と生るゝ人ひとをば皆釋迦如來の化身とこそ  
申せども、かゝる不思議ふしぎは未だ見聞せず、かゝる不思議ふしぎの候  
上八幡大菩薩の御誓おんちかひは月氏げつしにては法華經を説て正直捨方  
便べんとなのらせ給ひ、日本國にっぽんこくにしては正直の頂たかねに宿らんと誓  
ひ給ふ (内四條抄)

廿四 此この法華經ほけきやうは信じがたければ佛人の子となり、父母となり  
女おんなとなりなんどしてこそ、信しんせさせ給ふなれ、しかるにさに  
もをばせず、但たゞをやばかりなり、其中衆生ちゆうじゆうしやう悉是吾子の經文の  
ごとくならば、教主釋尊けしうしやくそんは入道にやうだう毘尼御前ひにぎみぜんの慈父じふか、し、日蓮  
は又御子またおんこにてあるべかりけるか、しばらく日本國にっぽんこくの人ひとをた  
すけんすけんと中國ちゆうごくに候か、宿善しゆくぜんたうとく候 (三緝入道御返事)

廿五 大日天子たいにちてんじと申すは、宮殿七寶也、其大さは八百十六里五十一

由旬也、其中そのなかに大日天子居し給ふ、勝無勝と申して二人の後  
あり、左右さゆうには七曜九曜しちやうきゆうつらなり、前まへには摩利支天御坐す、七  
寶はうの車くるまを八匹の駿馬しゆんばにかけて、四天下しよんてんかを一日一夜いちにちいちやに廻り四  
州しゆうの衆生の眼目がんもくと成給ふ、他の佛菩薩天子等ほとけぼつさうてんじとうは、利生のいみ  
じく御坐す事耳ごさすことみみにこれをきくとも、愚眼ぐがんに見ず、是こゝは疑ふ可  
きにあらず、眼前がんぜんの利生也、教主釋尊けしうしやくそんに御坐すば、争いかにか、是こゝの如  
くあらたなる事候べき、一乗じちやうの經きやうの力ちからにあらずんば、争いかにか、眼  
前の奇異きいをば現すべき、不思議ふしぎに思おもひ候いかにか、此天こゝてんの御恩ごおんを  
ば報ず可きと求め候に、佛法ぶつぽふ以前いぜんの人々も心ある人は、皆或  
は禮拜らいはいを進らせ、或は供養くやうを申し、皆しるしあり、又逆またさかを成す  
人は皆罰あり、今内典いまないてんを以て勘かんへて候に、金光明經こんくわうめいきやう云く、日天  
子じてんし及び月天子げつてんし、是の經きやうを聞くが故ゆゑに精氣充實しやうきちゆうじつす等云、最勝

王經に云く、此の經王の力に由て流暉四天下を遶る等、云當に知るべし、日月天の四天下を廻り給ふは佛法の力也。

(佛金音釋迦抄)

第四章 鉢相

一 大哉大悟大聖主垢なく染なく所著なし、中界示して丈六紫金の暉を爲し、方整照曜として甚だ明徹なり、毫相月のごとく旋れり、項に日の光あり、旋れる髮紺青にして頂に肉髻あり、淨き眼明鏡のごとく上下に胸ぎ、肩暖紺にして舒び方しき口頬なり、唇舌赤好にして丹華の若く、白齒の四十なる猶珂雪の如し、額廣く鼻脩く、面門開け、胸に萬字を表して、師子の臆なり、手足柔輭にして千輻を具へ、腋掌合縷あつて内外

に握れり、臂脩く肘長く、織し皮膚細輭にして毛右に旋れり、踝膝露現し、陰馬藏にして、細筋鎖骨鹿膊脹なり、表裏映徹し淨くして垢なし、濁水も染するなく塵をも受けず、是の如き等の相三十二あり、八十種好見るべきに似たり、而も實には相非相の色なし、一切有相眼の對絶せり、無相の相にして有相の身なり。

(總行品)

二 世尊は甚だ希有なり、功德智慧を以ての故に頂上の肉髻光明顯照す、其の眼長く廣くして紺青の色なり、眉間の毫相白きこと珂月の如し、齒白く齊密にして、常に光明あり、唇の色赤く好しきこと頻婆果の如し。  
三 微妙の淨き法身相を具し給へること三十二八十種好を以て用て法身を莊嚴せり。

(嚴王品)

(提婆品)

四 我をして六波羅密慈悲喜捨三十二相八十種好紫磨金色十力四無所畏四攝法十八不共法神通道力を具足せしむ (全上)

五 佛身は希有にして端嚴殊特なり第一微妙の色を成就し給ふ (嚴王品)

六 今大乘方等經典を誦す此經には十方の諸佛色身滅せずと説き給ふ (結經)

七 目を閉づれば則ち見目を開けば則ち失す是の語を作し己つて五体を地に投げよ (全上)

八 世尊は十力無畏十八不共法大慈大悲三念處まします常に世間に在して色の中の上色なり我れ何の罪ありてか而も見上つることを得ざると (全上)

九 我れ相を以て身を嚴り光明世間を照す (方便品)

十 金色三十二力諸の解脱同じく共に一法の中にして此の事を得ず八十種の妙好十八不共の法是の如き等の功德而も我れ皆己に失へり (譬喩品)

十一 諸佛の身は金色にして百福をもて相を莊嚴せり (安樂行品)

十二 容顏甚だ奇妙にましまして光明十方を照し給ふ (藥王品)

十三 是の諸の菩薩身皆金色にして三十二相無量の光明あり (涌出品)

十四 我れ兩つの臂を捨てなば必ず當に佛の金色の身を得べし (藥王品)

十五 淨華宿王智佛妙音菩薩に告げ給はく汝彼の國を輕しめて



下劣の想を生ずること莫れ、善男子彼の娑婆世界は高下不平にして土石諸山穢惡充滿せり、佛身卑小にして諸の菩薩衆も其の形亦小さし、而るに汝が身は四萬二千由旬我身は六百八十萬由旬なり、汝が身は第一端正にして、百千萬の福ありて光明殊妙なり、是の故に汝往いて彼の國を輕しめ、若くは佛菩薩及び國土に下劣の想を生ずること莫れ

(妙音品)

十六 身は眞金色にして無量百千の功德莊嚴せり、威德熾盛にして光明照曜し、諸相具足して那羅延堅固の身の如し

(妙音品)

十七 悲の体戒雷の震ふが如く、慈の意妙なること大なる雲の如く、甘露の法雨を澎ぎ煩惱の蝕を滅除す

(華門品)

十八 汝一切智十力等の佛法を証りて、三十二相を具せば乃ち是れ眞實の滅なり

(化城品)

十九 何に況んや大覺世尊の三十二相八十種好紫磨金色の粧ひ嚴くして迦陵頻の御音を以て一切衆生を皆佛に成し給はん、經を説かせ給ふ慈悲深重に御座す佛の御餘波惜み進する歎き思遣るに上陽人の上陽宮に閉籠められて歎きし歎にも勝れ、堯王の娘娥皇女英二人の娘舜王に別れ奉て歎きし歎にも勝れ、蘇武が胡國に流され十九年雪中に住けん思ひにも勝れり、餘の御戀しさに木を以て佛の御形を作り奉るに三十二相の一相をだにも作り似せ奉らず

二十 佛には必ず三十二相あり、其相と申すは梵音聲相無見頂相

(十八身延記)

肉髻相、白毫相、乃至千輻輪相等なり。此三十二相の一相は百福を以て成し給ふ。百福と申すは假令は大醫ありて、日本國漢五天竺十六の大國五百の中國十千の小國乃至一閻浮提四天天下六欲天乃至三千大千世界の一切衆生の眼の盲なるを本の如く一時に開きたらん程の大功德を一の福として此一福を百重て候はんを以て三十二相の中の一相を成せり。されば此の一相の功德は三千大千世界の草木の數よりも多く四天下の雨の足よりも過ぎたり。

(十九法蓮抄)

廿一 佛に三十二相あり、皆是れ色法なり。最下の千輻輪より終り無見頂相に至るまで三十一相は可見有對色なれば書くべし。作るべし。梵音聲の一相は不可見無對色なれば書くべからず。作るべからず。佛滅後には木畫の二像あり、是三十一相

にして梵音聲なし。又心法闕けたり。故に佛にあらす。生身の佛と木畫の二像を對するに天地雲泥なり。何ぞ混梨の後分に生身の佛と滅後の木畫の二像と功德齊等なりと云ふや。又瓔珞經には木畫の二像は生身の佛に劣れりと説く。然りと雖も木畫の二像の前に經を置けば三十二相を具足するなり。

(三十一法華骨目抄)

廿二 佛には三十二相を備へ給ふ。一の相は皆百福莊嚴の相なり。肉髻白毫等は菓の如し。因位の華の功德に之を得て三十二相をそなへ給へり。乃至無見頂相と申すは釋迦佛の御身は丈六なり。竹杖外道釋尊の御長を計らず。御頂を見奉らんとせしに御頂を見ず。應持菩薩も見ず。大梵天王も見ず。

(十九梵音聲抄)

廿三 我即是父の柔軟の御すかた見奉るべきをも未だ見奉らず  
是誠に袂をくたし智をこがす歎ならざらんや

(三十一) 持法華問答抄

第五章 智慧

- 一 如來は方便知見波羅密皆已に具足せり舍利弗如來の知見は廣大深遠なり (方便品)
- 二 唯佛と佛とのみ乃し能く諸法の實相を究盡し給へり (全上)
- 三 假使世間に満てたらんもの皆舍利弗の如くにして思を盡して共に度量すとも佛智を測ること能はず正使十方に満てたらんもの皆舍利弗の如く及び餘の諸の弟子亦十方の

- 利に満てんもの思を盡して共に度量すとも亦復知ること能はず (全上)
- 四 如來は一切諸法の歸趣を觀知し亦一切衆生の深心の所行を知ることを通達無碍なり又諸法に於て究盡明了にして諸の衆生に一切の智慧を示す (藥草品)
- 五 唯如來のみありて此の衆生の種相體性を知めし給ふ (藥草品)
- 六 種々の言辭をもつて一法を演說し給ふこと佛の智慧に於て海の一滴の如し (藥草品)
- 七 我れ如來の知見力を以ての故に彼の久遠を觀ること猶今日の如し (化城品)
- 八 佛智は淨ふして微妙に無漏無所礙にして無量劫を通達す

(全上)

(全上)

(攝婆品)

九 世尊未だ出て給はざる時は十方常に暗限なり

十 深く罪福の相を達して徧く十方を照し給ふ

十一 如來は如實に三界の相を知見す生死の若は退若は出ある

十二 如來は亦在世及び滅度の者無し實にあらず虚にあらず

十三 如にあらず異にあらず三界の三界を見るが如くならず斯

の如きの事如來明かに見て錯謬あること無し (攝婆品)

十二 我智力是の如し慧光照すること無量なり (全上)

十三 能く衆生に佛の智慧如來の智慧自然の智慧を與ふ如來は

一切衆生の大施主なり (全上)

十四 佛は四十二品の無明と申す闇を破る妙覺の佛なり八月十

五夜の満月のごとし此菩薩等は四十一品の無明を盡して

等覺の山の頂に登る十四夜の月のごとし佛と申すは上の

諸人には百千萬億倍勝れさせ給へる大人なり

(十法蓮抄)

十五 慧日大聖尊佛眼を以て兼て之を鑑み給ふが故に諸の大聖

を捨棄して此四聖を召し出し要法を傳て末法の弘通を定

め給ふなり

(二十五大田抄)

十六 大覺世尊は此れ一切衆生の大導師大眼目大橋梁大船師大

福田なり外典外道の四聖三仙其名は聖なりといへども實

には三惑未斷の凡夫其名は賢なりといへども實には因果

を辨へざる事嬰兒のごとし彼を船として生死の大海を渡

るべしや彼を橋として六道の巷をゑがたし我釋迦大師は

變易猶わたり給へり況や分段の生死をや元品の無明の根

本猶かたぶけ給へり況や見思枝葉の鹿惑をや (三開目抄)  
 十七 止觀の二字をば止名佛知觀名佛見と釋すれども迹門の佛  
 の知見にして妙覺極果の知見には非るなり其故は止觀は  
 天台の己證界如三千三諦三觀を正と爲す迹門の正意是な  
 り故に知んぬ迹門の知見なりと云ふ事を (三十八立正觀抄)

第六章 慈 悲

一 我れ佛眼を以て其の信等の諸根の利鈍を觀じて度すべき  
 所に隨つて處々に名字の不同年紀の大小を説く

(壽量品)

二 此の子惑ひべし毒に中てられて心皆顛倒せり (全上)  
 三 我れ諸の衆生を見れば苦海に没在せり (全上)

四 毎に自ら是の念を作す何を以てか衆生をして無上道に入  
 り速に佛身を成就するを得せしめんと (全上)  
 五 我れ本誓願を立て一切の衆をして我が如く等くして異  
 なること無らしめんと欲ほしき我昔の所願の如き今は己  
 に満足しぬ一切の衆を化して皆佛道に入らしむ

六 諸佛の本誓願は我行ずる所の佛道を普く衆生をして亦同  
 じく此の道を得せしめんと欲す (方便品) (全上)  
 七 貪愛を以て自ら蔽ひ盲瞶にして見る所なし大勢の佛乃與  
 斷苦の法を求めず深く諸の邪見に入り苦を以て苦を捨て  
 んとす是の衆生の爲の故に而も大悲心を起しき (全上)  
 八 今此の幼童は皆是れ吾子なり愛に偏黨無し (譬喻品)

九 我れ一切を觀ること普く皆平等にして彼此愛憎の心あること無し、我れ貪著なく亦限礙無し、恒に一切の爲に平等に法を説く、一人の爲にするが如く衆多にも亦然なり

(藥草喻品)

十 三千大千世界を觀るに乃至芥子許も是れ菩薩の身命を捨て給ふ處にあらざることをあること無し、衆生の爲の故なり

(長髮品)

十一 慈眼をもつて衆生を視る、福聚の海は無量なり

(普門品)

十二 恩澤普く潤ひ慈被ること外無し、苦の衆生を攝して道跡に入らしむ

(十功德品)

十三 涅槃經に云く、一切衆生の異の苦を受るは如來一人の苦なりと

(三十七諫曉八幡抄)

十四 阿闍世王は十六の大國の惡人を集め、一四天下の外道を語ひ提婆を師として無量の惡人を放ち、佛弟子を咸は罵り、或は打ち、或は害し、或は殺せしのみならず、賢王にて失無りし父の大王に一尺の釘をもて七處まで打付けはりつけにして、生たる母をば玉のかざしをつかみ、刀を頸に當てし重罪のつもり、惡瘡七處まで出て三七日を経て三月七日に大地破れて無間地獄にをち、一劫を経べかりしかども、佛所に参りて惡瘡愈るのみならず、無間地獄の大苦を脱れて四十年の壽命を延べたりき、又耆婆大臣も御使なりしかば、炎の中に入て、瞻婆長者が子を取り出したりき、之を以て之を思ふに、一度も佛を供養し奉る人は何なる惡人女人なりとも成佛得道疑無し、提婆には三十相のみあて二相は闕けたり、所

謂る白毫と千福輪となり佛に二相劣りしかば弟子等輕く  
 思ひぬべしとて、燈火を集めて眉間に付けて白毫と云ひ千  
 福輪には菊形を作らせて足に付て行程に足焼て大事に成  
 り、結句は死んとせしかば佛に白す佛御手を以て摩て給ふ  
 に即ち愈へぬ、苦痛なをりて改悔あるべき歎と思ひしに、さ  
 はなくて瞿曇か習へる醫師はこざかしかりけり、又は術に  
 てあるなりと云ふなり、かゝる敵にも佛は怨をなし給はざ  
 りし人なり、何に況んや佛を一度も信じ奉らん者をば争か  
 捨て給ふべき

(十三法蓮抄)

十五 此土の我等衆生は五百塵點劫より己來教主釋尊の愛子な  
 り、不孝の失に依て今に覺知せずと雖も、他方の衆生には似  
 るべからず、有縁の佛と結縁の衆生とは譬へば天月の清水

十六 淫樂經に云く、譬へば七子の如く父母平等ならざるにあら

(九法華取要抄)

に淫ふが如し  
 されども、然れども病者に於ては心則ち偏へに重しと

十七

(九法華取要抄)

以何令衆生得入無上道の御心のそこ、順縁逆縁の御ことの  
 は已に本懐なれば持つ者も又本誓に叶ひ本意に叶ふ故に  
 是れ佛の恩を報ずるなり、悲母深重の經文心安ければ唯我

(十二持法講問答抄)

十八

我等が慈父大覺世尊は人壽百歳の時中天竺に出現坐して  
 一切衆生の爲めに一代聖教を説き給ふ、佛在世の一切衆生  
 は過去の宿習有て佛に縁厚かりしかば既に得道成しぬ、我  
 滅後の衆生をば如何せんと歎き給ひしかば八萬聖教を文

字と成す

百七十八 (高橋抄)

第七章 功德

- 一 是れより己來始めて四十餘年を過ぎたり世尊云何ぞ此の少時に於て大に佛事を作し給へる佛の勢力を以てか佛の功德を以てか (涌出品)
- 二 如來の祕密神通の力 (壽量品)
- 三 所作の佛事未だ曾て暫も廢せず (全上)
- 四 常に法を説いて無數億の衆生を教化して佛道に入らしむ、爾りしより來た無量劫なり (全上)
- 五 善哉善哉迦葉善く如來の眞實の功德を説く誠に所言の如し如來には復無量無邊阿僧祇の功德あり汝等無量億

- 六 劫に於て説くとも盡すこと能はず (藥草品)
- 是の大長者財富無量にして種々の庫藏悉く皆充溢せり(中) 畧我れ此の物を以て周く一國に給すとも猶尙匱しからず (譬喻品)
- 何に況んや諸子をや (信解品)
- 大に富んで財寶無量なり金銀瑠璃珊瑚琥珀頗黎珠等其の諸の倉庫に盈溢せり (信解品)
- 八 今法王の大寶自然にして至れり佛子の得べき所の如きは皆已に之を得たり (全上)
- 九 我等佛の功德に於て言をもて宣ふること能はず (授記品)
- 十 道風徳香一切に薫ず (徳行品)
- 十一 栴檀の香風衆心を悦可す (序品)
- 十二 此の妙の珠は昔釋迦如來の檀波羅密と申して身を飢たる



虎にかゝるし功德鳩にかゝるし功德等尺羅波羅密と申して須陀摩王としてそらことせざりし功德等忍辱仙人として身を迦梨王に任せし功德能施太子尙闍梨人等の六度の功德を妙の一字にこめ給ふて末代惡世の我等衆生一善をも修せざれども六度萬行を満足する功德を與へ給ふ今此三界皆是我有其中衆生悉是吾子是なり我等具縛の凡夫忽ちに教主釋尊と等くなる功德を全体うけとる故に經に云く我が如く等くして異なることなし等云云 (十九日抄)

十三 七步蛇に食れたる人一步二歩乃至七歩をすぎず毒の用の不思議にて七歩を過ぎず又胎内に七日有が如きは必ず七日の内にとりて餘の形と成るに八日を過ぎず今の法蓮上人も又是の如し教主釋尊の御功德御身に入替らせ給ひぬ

(十法蓮抄)

十四 釋迦如來無量劫の間菩薩の行を立給ひし時一切の福徳を築て六十四と成して功德を身に得給へり其の一分をば我身に用ひ給ふ (四十四圓抄)

(八觀心本尊抄)

十五 釋尊の因行果徳の二法は妙法蓮華經の五字に具足す我等此五字を受持すれば自然に彼の因果の功德を譲り與へ給ふ四大聲聞の領解に云く無上寶珠不求自得云云

第八章 力 用

一 如來今諸佛の智慧諸佛の自在神通の力諸佛の師子奮迅の力諸佛の威猛大勢の力を顯發し宣示せんと欲ばす

二 如來の秘密神通の力

(涌出品)

三 諸佛の神力は是の如く無量無邊不可思議なり

(神力品)

四 我れ今娑婆世界に詣るも皆是れ如來の神通遊戯

(妙音品)

五 如來は知見廣大深遠にして無量無碍無所畏禪定解脱三昧  
あつて深く無際に入り一切未曾有の法を成就せり

(方便品)

六 汝等疑あること勿れ我はこれ諸法の王なり

(全上)

七 彼の長者は復身に力ありと雖も而も之を用ひず但慙歎  
の方便を以て諸子の火宅の難を勉濟し然る後に各に珍寶  
の大車を與ふ

(譬喩品)

八 諸佛は希有にして無量無邊不可思議の大神通力あり無漏

(全上)

九 迦葉當に知るべし如來は是れ諸法の王なり

(藥師品)

十 世尊は甚だ希有にして値遇すること得べきこと難し無量  
の功德を具して能く一切を救護し給ふ

(化城品)

十一 今佛世に出て衆生の爲に眼と作る世間の歸趣する所と  
して一切を救護し給ふ爲れ衆生の父なり哀愍饒益し給ふ  
者なり

(全上)

十二 如來も亦復是の如く三界の中に於てこれ大法王なり

(安樂行品)

十三 如來も亦爾なり諸法の王として忍辱の大力智慧の寶藏な  
り大悲を以て法の如く世を化す

(全上)

十四 世尊は大力ましまして壽命量るべからず (分別功德品)

十五 神智無量にして一切を將導し給ふ (不觀品)

十六 能く無畏に施す者 (普門品)

十七 能く世間の苦を救ふ (普門品)

十八 是の故に今大自在を得法に於て自在にして法王となれり (徳行品)

十九 復光明を放ちて行者の身を照し其をして身心自然に歡喜

して大慈悲を起し普く一切を念せしむ (終經)

二十 久遠實成の釋迦如來我昔の所願の如く今は已に満足しぬ

一切衆生を化して皆佛道に入らしむと御願已に満足す如

來の滅後後五百歲中廣宣流布の付囑を説んが爲め地涌の

菩薩を召出し本門當体の蓮華要を以て付囑し給ふ文なれ

廿一

ば釋尊出世の本懷道場所得の秘法末法我等が現當二世を成就する當躰の蓮華の誠證此文なり (廿三當休蓮華抄)

譬へば高き岸の下に人ありて登ること能はざらん又岸

の上に人ありて網ををろして此網にとりつかば我れ岸の

上に引登さんと云はんはんに引人の力を疑ひ網の弱からん事

をあやふみて手を納めて是をとらざらんが如し争か岸の

上に登る事をうべき若其語に隨ひて手をのべ是を取んに

は即ち登る事をうべし唯我一人能爲救護の佛の御力を疑

ひ以信得入の法華經の教の綱をあやふみて決定無有疑の

妙法を唱へ奉らざらんは力及ばず菩提の岸に登る事難し

不信の者は墮罪泥梨の根元なり (廿一持法華問答抄)

廿二 釋迦如來に値ひ奉て元品の大石をわらんと思ふに教主釋

尊四十餘年が間は因分可説果分不可説と申して、妙覺の功徳を説き顯し給はず、されば妙覺の位に登る一人一人もなかりき、本意なかりし事なり、而るに靈山八年が間に唯一佛乘を名けて果分と爲すと説き給ひしかば、諸の菩薩皆妙覺の位に上りて釋迦如來と悟り等しく須彌山の頂に登りて四方を見るが如く、長夜に日輪の出でたらんが如く、あかくならせ給ひしかば、佛の仰なくとも法華經を弘めじ又行者に替らじとはをぼしめすべからず、されば我れ身命を惜まず但だ無上道を惜む身命を惜まずして當に廣く此經を説くべし等とこそ誓給ひしか

(新編抄)

第九章 權 佛

- 一 設ひ佛なりとも權教の佛は佛界の名言を付くべからず、權教の三身は未だ無常を免れざる故に (富林義抄)
- 二 根本大師の御釋に有爲の報佛は夢中の權果、無作の三身は覺前の實佛なりと釋して阿彌陀佛等の有爲無常の佛をば大にいましめ捨をかれ候なり、既に憑ひ所の阿彌陀佛有名無實にして名のみ有つてその体なからんには往生すべき道理をば委く須彌山の如くに高く立て大海の如くに深く云ふとも何の所詮あるべきや (一請宗問答抄)
- 三 小乗の劣應身通教の勝應身別教の臺上の盧舍那爾前の圓教の虚空爲座の毗盧遮那佛猶以て之を用ひず

四

教主釋尊は始成正覺の佛四十餘年の間四教の色身を示現し、爾前迹門涅槃經等を演説して一切衆生を利益し給ふ所謂華嚴の時の十方臺上の盧舍那阿含經の三十四心斷結成道の佛方等般若の千佛等大日金剛頂等の千二百餘尊並に迹門寶塔品の四土色身涅槃經の或見丈六或現小身大身或見盧舍那或見身同虛空の五種の身乃至八十御入滅舍利を留めて正像末を利益し給ふ本門を以て之を言はゞ教主釋尊は五百塵點已前の佛なり

(三本門成林抄)

五

迹門には但是れ始覺の十界互具を説いて未だ必ず本覺本有の十界互具を明さず故に所化の大衆能化の圓佛皆是れ悉く始覺なり若し爾らば本無今有の失何ぞ免るゝを得ん

や、當に知るべし四教の四佛則ち圓佛と成るは且く迹門の所談なり是の故に無始の本佛を知らず故に無始無終の義缺けて具足せず又無始色心常住の義なし但し是法住法位世間相常住と説くことは未來常住にして是れ過去常にあらざるなり

(法界抄)

第十章 餘論

日本の守屋等は漢土日本の大小の神祇を信用して教主釋尊の御敵と成しかば神は佛に隨ひ奉り行者は皆亡びぬ今の代此の如く上に擧る所の百濟國の佛は教主釋尊也猶阿彌陀佛と日本國を誑して釋尊を他佛に代たり神と佛と佛との差別こそ有とも釋尊を捨る心は俱一也

(中山真蹟追加智妙房抄)

二 今日本國の四十五億八萬九千六百五十九人の一切衆生善導慧心永觀法然等の大天魔にたばらかされて、釋尊をなけすて、阿彌陀佛を本尊とす、あまりの物のぐるわしさに十五日を奪ひ取て阿彌陀佛の日となす、八日をまぎらかして、藥師佛の日とす

(并九四條抄)

三 有縁の佛と結縁の衆生とは、譬へば天月の清水に浮ぶか如く、無縁の佛と衆生とは、譬へば聾者の雷聲を聞かず、盲者の日月に向ふが如し、而るに或る人師は釋尊を下して大日如来を仰崇し、或る人師は世尊は無縁阿彌陀は有縁なりと、或る人師の云く小乗の釋尊、或は華嚴經の釋尊、或は迹門の釋尊と、此等の諸師並に檀那等の釋尊を忘れて諸佛を取るこ

とは、例せば阿闍世太子の頻婆娑羅王を殺し釋尊に背ひて提婆達多に付きしが如きなり、二月十五日は釋尊御入滅の日乃至十二月十五日も三界慈父の御遠忌なり、善導法然永觀等の提婆達多に誑かされて阿彌陀佛の日と定め畢んぬ、四月八日は世尊御誕生の日なり、藥師佛に取り畢んぬ、我慈父の諱日を他佛に替ゆるは孝養の者なるか如何、壽量品に云く我れも亦爲れ世の父狂子を治せんが爲の故に等云云

(九法華取要抄)

四 釋迦佛御造立の御事、無始曠劫より未だ顯れましまさぬ已心の一念三千の佛造り顯れましますか、はせ參りてをがみ參らせ候ばや、欲令衆生開佛知見乃至然我實成佛已來は是れ也、但し佛の御開眼の御事はいそぎいそぎ伊房をもて

五

はたし参らせさせ給ひ候へ、法華經一部御佛の御六根に  
 み入れ参らせて生身の教主釋尊になし参らせて、かへりて  
 迎ひ入れまいらせさせ給へ  
 (内七真開釋迦抄)  
 月氏には教主釋尊寶塔品にして、一切の佛をあつめさせ給  
 ひて大地の上に居せしめ、大日如來計寶塔の中の南の下座  
 にすへ奉りて、教主釋尊は北の上座につかせ給ふ、此大日如  
 來は大日經胎藏界の大日金剛頂經金剛界の大日の主君な  
 り、兩部の大日如來を郎從等と定めたる多寶佛の上座に教  
 主釋尊居させ給ふ  
 (六報恩抄)

六

華嚴經には或は釋迦佛道を成し已りて不可思議劫を經る  
 を見る等云云、大日經には我は一切の本初なり等云云、何ぞ  
 但久遠實成壽量品に限らん、譬は井底の蝦が大海をみず、山

七

左が洛中をしらざるがごとし、汝但壽量の一品をみて、華嚴  
 大日經等の諸經をしらざるか  
 (二開目抄)  
 次に法身の説法と云事、何れの經の説ぞや、弘法大師の二教  
 論には楞伽經に依つて法身の説法を立て給へり、其楞伽經  
 とは釋迦の説にて、未顯眞實の權教也、法華經の自受用身に  
 及ばざれば法身の説法とは云ともいみじくもなし、此の上  
 に法は定て説かす、報は二義に通ずるの二身の有をば一向  
 知らざる也、故に大日法身の説法と云は、定て法華の陀受用  
 身に當る也、次に大日無始無終と云事、既に我昔道場に坐し  
 て四魔を降伏すとも宣へ、又四魔を降伏し六趣を解脱し一  
 切智智之明を満足す等云云、此等の文は大日は始めて四魔を  
 降伏して始めて佛に成とこそ見わたれ、全く無始の佛とは見

せず、又佛に成て何程を経ると説かざる事は、權經の故也。實經にこそ五百塵點等とは説かれたれ、次に法界宮とは色究竟天歟、又何れの處ぞや、色究竟天、或は佗化自在天は法華宗には別教の佛の説處と云て、いみじからぬ事に申す也。又菩薩の爲に説をも高名もなし、例せば華嚴經は一向菩薩の爲なれども、尙法華の方便と云はるれ、只佛出世の本意は成佛し難き二乗の佛に成を一大事とは云給へり、されば大論には二乗の佛に成を密教と云ひ、二乗作佛を説かざるを顯教と云へり、此の趣ならば眞言の三部經は、二乗作佛の旨無が故に遠て顯教と云ひ、法華は二乗作佛を旨とする故に、密教と云ふべき也。隨て諸佛秘密之藏と説ば、子細はなし。

(三十五 眞言天台勝劣)

### 第四篇 教法

#### 第一章 總要

- 一 如來も亦復是の如く世に出現すること、大雲の起るが如く、大音聲を以て普く世界の天人阿修羅に徧せること、彼の大雲の徧く三千大千國土に覆ふが如し。 (藥師品)
- 二 人の至心に佛舍利を求むるが如く、是の如くに經を求め得已つて頂受せん。 (譬喻品)
- 三 我れ佛法を以て汝に囑累す(中畧)我滅度の後所有の舍利亦汝に付屬す。 (藥王品)
- 四 是の經典を得たらん者は、敬信すること、佛身を視上るが如く、等しくして異なること無らしめん。 (十功德品)



五

我等が慈父大覺世尊は、人壽百歳の時、中天竺に出現し座して、一切衆生の爲めに一代聖教を説給ふ、佛在世の一切衆生は過去の宿習有て佛に縁厚かりしかば既に得道成ぬ、我が滅後の衆生をば如何にせんと歎き給ひしかば、八萬聖教を文字と成して一代聖教の中に、小乘經をば迦葉尊者に譲り給ふ、大乘經並びに法華經涅槃等をば文殊師利菩薩に譲り給ふ、但し八萬聖教の肝心、法華經の眼目たる妙法蓮華經の五字をば迦葉阿難にも譲り給はず、又文殊普賢觀音彌勒地藏龍樹等の大菩薩にも授け給はず、此等の大菩薩等の望申せしかども佛許し給はず、大地の底より上行菩薩と申せし老人を召し出して多寶佛十方の諸佛の御前にして釋迦如來七寶塔の中にして、妙法蓮華經の五字を上行菩薩に譲り

給ふ、其の故は我滅後の一切衆生は皆我が子也、されば平等に不便に思ふ也、然れども醫師の習病に隨て藥を與ふる事なれば我が滅後五百年之間は、迦葉阿難等小乘經の藥を以て一切衆生に與へよ、次の五百年之間は、文殊師利菩薩彌勒菩薩龍樹菩薩天親菩薩等、華嚴經大日經般若經等の藥を一切衆生に與へよ、我が滅後一千年過て像法の時には、藥王菩薩觀世音菩薩等、法華經の題目を除いて、餘の法門の藥を一切衆生に授けよ、末法に入りなば、迦葉阿難等文殊彌勒菩薩等、藥王觀音等の讓られし處の小乘經大乘經並びに法華經は文字は有とも、衆生の病の藥とは成べからず、所謂病は重し藥は淺し、其の時上行菩薩出現して、妙法蓮華經の五字を一閻浮提の一切衆生に授くべし

(三十五 高橋抄)

六

其上法華經の肝心方便壽量品の一念三千久遠實成の法門  
 は此妙法の二字におさまれり天台大師玄義十卷造り給ふ  
 第一の卷には畧して妙法蓮華經の五字の意を宣給ふ第二  
 卷より七の卷に至るまでは又廣く妙の一字を宣べ八の卷  
 より九の卷に至るまでは法蓮華の三字を釋し第十の卷に  
 は經の一字を宣給へり經の一字に華嚴阿含方等般若涅槃  
 經を收めたり妙法の二字は玄義の心は百界千如心佛衆生  
 の法門也止觀十卷の心は一念三千百界千如三千世間心佛  
 衆生三無差別と立給ふ一切の諸佛菩薩十界の因果十方の  
 艸木瓦礫等妙法の二字にあらずと云ふ事なし華嚴阿含等  
 の四十餘年の經經小乘經の題目には大乘經の功德を收め  
 ず又大乘經にも往生を説く諸經の題目には成佛の功德を

七

攝めず又王有りと王中の王たる經なし佛も亦經に隨て  
 佗佛の功德を收めず平等意趣を以て佗佛自佛同じと云ひ  
 或は法身平等を以て自佛佗佛同じと云ふ實には一佛に一  
 切佛の功德をおさめず今法華經は四十餘年の諸經を一經  
 に收めて十方世界の三身圓滿の諸佛をあつめて釋迦一佛  
 の分身の諸佛と談ずる故に一佛一切佛にして妙法の二字  
 に諸佛皆收まれり故に妙法蓮華經の五字を唱る功德莫大  
 也諸經の題目は法華經の所開也妙法は能開也(唱題抄)  
 華嚴經觀經大日經等には又一切有るやうなれども二乘を  
 佛になすやうと久遠實成の釋迦佛なし例せば華さいて果  
 ならず雷なつて雨ふらず鼓あつて音なく眼あつて物をみ  
 ず女人あつて子をうまず人あつて命なく又神なし大日の

八

眞言藥師の眞言阿彌陀の眞言觀音の眞言等又かくのごとし、彼の經經にしては大玉須彌山日月良藥如意樹利劍等のやうなれども、法華經の題目に相對すれば雲泥勝劣なるのみならず、皆各當體の自用を失ふ例せば衆星の光の一の日にうばはれ諸の鐵の一の磁石に値て利精のつき、大劍の小火に値て用を失ひ、牛乳驢乳等の師子王の乳に値て水となり、衆狐か術一犬に値て失ふ、狗犬が小虎に値て色を變ずるがごとし、南無妙法蓮華經と申せば南無阿彌陀佛の用も南無大日眞言の用も、觀世音菩薩の用も一切の諸佛諸經諸菩薩の用、皆悉く妙法蓮華經の用に失はる、彼の經經は妙法蓮華經の用を借ずば、皆いだつらものなるべし (七報恩抄)

妙とは天竺には薩と云ひ漢土には妙と云ふ、妙とは具足の

九

義也、具とは圓滿の義也、法華經の一一の文字、一字一字に餘の六萬九千三百八十四字を納めたり、譬へば大海の一滴の水に一切の河水を納め、一の如意寶珠の芥子計なるが一切の如意寶珠の財を降すが如し (十一題目抄)

妙と申す事は開と云事也、世間に財を積む藏に鑰なれば開く事難し、開かざれば藏の内の財を見ず、華嚴經は佛説き給ひたりしかども、彼の經を開く鑰をば佛彼の經に説き給はず、阿含方等般若觀經等と、四十餘年の經經も佛説給しかども、彼の經經の意をば開き給はず、門を閉ぢ置せ給ひたりしかば、今彼の經經を悟る者一人も無りき、設ひ解ると思ひし者も、僻見にて有し也、而るに佛法華經を説せ給ひて、諸經の藏を開かせ給ひき、此の時に四十餘年の九界の衆生始て

十

諸經の藏の内の財をば見知りし也  
(十一)題目抄  
 妙と申すは絶という事絶と申す事は此の經起れば已前の  
 經經を斷止ると申す事なるべし、正直捨方便の捨の文字の  
 心、日出ぬれば、星かくるの心なるべし、但し爾前の經經は塔  
 のあししるなれば、すつるとも又塔をすりせん時は用ゆべ  
 し、又切すつべし、三世の諸佛の説法の儀式かくのごとし

(十二)法門可申抄

第二章 教法の信仰に約す

一

此の經卷に於て敬ひ視ること佛の如くにして、種々に華香  
 瓔珞抹香塗香燒香縮蓋幢旛衣服伎樂を供養し乃至合掌恭  
 敬せん  
(法師品)

二

法華經の乃至一句に於ても受持し讀誦し解説し書寫し種  
 々に經卷に華香瓔珞抹香塗香燒香縮蓋幢旛衣服伎樂を供  
 養し合掌恭敬せん是の人は一切世間の瞻奉すべき所なり  
(法師品)

三

藥王在々處處に若しは説き、若しは讀み、若しは誦し、若しは  
 書き、若しは經卷所住の處には皆七寶の塔を起て、極めて  
 高廣嚴飾ならしむべし、復舍利を安くことを須むず所以は  
 何ん此の中に已に如來の全身いますなり  
(法師品)

四

其れ能く此の經法を護ることあらん者は則ち我及多寶を  
 供養するなり  
(寶塔品)

五

若し此の經を説かば、則ちこれ多寶如來及諸の化佛を見る  
 なり  
(寶塔品)

六 我等亦是の眞淨の大法を得て受持し讀誦し解説し書寫し  
て之を供養せんと欲す (神力品)

七 若し復人ありて七寶を以て三千大千世界に満て、佛及大  
菩薩辟支佛阿羅漢に供養せん此の人の所得の功德も此の  
法華經の乃至一四句偈を受持する其の福の最も多きには  
如かず (樂王品)

八 八百萬億那由他恆河沙等の諸佛を供養せん汝が意に於て  
云何ん其の所得の福これ多しや否や甚だ多し世尊佛の言  
はく若し善男子善女人能く是の經に於て乃至一四句偈を  
受持し讀誦し義を解し説の如く修行せん功德甚だ多し  
九 此の方等經典は是れ諸佛の眼なり諸佛是に因て五眼を具  
(陀羅尼品)

十 することを得たり佛の三種の身は方等より生ず是れ大法  
印にして涅槃海を印す此の如き海中より三種の佛の清淨  
身を生ず此の三種の身は人天の福田應供の中の最なり  
諸佛如來は此の法より生じ大乘經に於て記別を受くるこ  
とを得たり (新經)

十一 當に大乘經を誦して諸の菩薩の母を念ずべし (結經)  
十二 佛出現し給ひて佛教と申す藥を天と人と神とに與へ給ひ  
しかば燈に油をそゑ老人に杖を與へたるが如し天神等は  
還つて威光を増し勢力を増せし事成劫の如し佛教に又五  
味のあじはひ分れたり在世の衆生は成劫の程こそ無りし  
かどもいたう衰ざる衆生なれば五味の中に何の味を嘗て  
も威光勢力も減じ候はざりしが佛滅度の後正像二千年過

て末法に成ぬれば本の天人脩羅大龍等は皆年重りて心もよはく今生るゝ天人脩羅等は或は小果報或は惡天人等也小乗權大乘等の乳酪生蘇熟蘇味を服せしむるは老人に麤食を與へ高人に麥飯を奉るが如し而るに之を辨へざる人古に習て日本國の一切の諸神等の御前にして阿合方等般若華嚴大日經等を法樂し俱舍成實律法相三論華嚴真言淨土禪等の僧を護持の僧と成し給へは唯老人に麤食を與へ小兒に強き飯を食るが如し

(外七 諫曉八 雜抄)

十三 此の娑婆世界は耳根得道の國也

(外七 一念三千法門)

十四 譬ば大醫の一切の病の根源藥の淺深は辨へたれども故なく大事の藥をつかふ事なく病に隨ふが如しされば佛の滅後二千年の間は煩惱の病轉かりければ一代第一の良藥の

妙法蓮華經の五字をば勸めざりけるか今末法に入りぬ人ごとに重病あり彌陀大日釋迦等の輕藥にては治し難し又月はいみじけれども秋にあらざれば光を惜む花は目出たけれども春にあらざればさかず一切時による事なりされば正像二千年の間は題目の流布の時に當らざるか又佛教を弘むるは佛の御使なり隨つて佛の弟子の讓を得ること各別なり正法千年に出でし論師像法千年に出づる人師等は多くは小乗權大乘法華經の或は迹門或は枝葉を讓られし人々なりいまだ本門の肝心たる題目を讓られし上行菩薩世に出現し給はず此の人末法に出現して妙法蓮華經の五字を一閻浮提の中國ごと人ごと弘むべし例せば當時日本國に彌陀の名號の流布しつるが如くなるべきか

十五 譬ば大地の上(四妙密抄)に人畜草木等あれども、日月の光無れば眼有る人も人畜草木の色形を知らず、日月出給てころ始て是をば知事なれ、爾前の諸經は長夜の闇の如し法華經の本迹二門は日月の如し

十六 末代に於て眞實の善知識あり所謂法華涅槃是なり問ふて云く人を以て善知識となすは常の習なり法を以て知識となす證ありや答へて云く人を以て知識となすは常の習なり然りと雖も末代に於ては眞の知識なし法を以て知識となすに多くの證あり摩訶止觀に云く或は知識に従ひ或は經卷に従ふて上に説く所の一實の菩提を聞くと此の文の意は經卷を以て善知識となすなり

(守護國家論)

十七 筍百二十本、さゝげいも一駄送り給候畢んぬ妙法蓮華經第七に云く若し復人有つて七寶を以て三千大千世界に満て佛及び大菩薩辟支佛阿羅漢に供養せん是の人の所得の功德も此法華經の乃至一四句偈を受持する其福の最も多きには如かじ云文句十に云く七寶を四聖に奉るは一偈を持つに如かじと云ふは法は是聖の師なり能生能養能成能榮法に過たるはなし故に人は軽く法は重き也記十に云く父母必ず四護を以て子を護るが如し今發心法に由るを生と爲し始終隨逐するを養と爲し極果を滿せしむるを成と爲し能く法界に應ずるを榮と爲す四不同なりと雖も法を以て本と爲す文經竝に天台妙樂の心は一切衆生を供養せんと阿羅漢を供養せんと乃至一切の佛を七寶を盡して

三千大千世界に盛満て供養せんよりは、法華經を一偈或は受持し、或は護持せんは勝れたりと(中略)九界の一切衆生を佛に相對して此を計るに、一切衆生の福は一毛の輕さが如く、佛の福は大山の重さが如し、一切の佛の御福は梵天三昧の衣の輕さが如く、法華經の一字の福の重き事は大地の重きが如し、人は輕しと申すは、佛を人と申す、法は重しと申すは法華經也

(二十七寶經法重抄)

十八

佛は子也、法華經は父母也、譬ば一の父母に千子有て、一人の父母を讚歎すれば千子悦をなす、一人の父母を供養すれば千子を供養するに成ぬ、法華經を供養する人は、十方の佛菩薩を供養する功德と同じ也、十方の諸佛は妙の一字より生じ給へる故也、譬ば一の師子に百子あり、彼百子諸の禽獸に

犯さるゝに、一の師子王吼れば百子力を得、諸の禽獸皆頭七分にわる、法華經は師子王の如し、一切の獸の頂とす、法華經の師子王を持つ女人は一切の地獄餓鬼畜生等の百獸に恐るゝ事なし

(十八千日尼抄)

十九

法華經をば國王父母日月大海須彌山天地の如く思食せ、諸經をば關白大臣公卿乃至萬民衆星江河諸山草木等の如く思食すべし、我等が身は末代造惡の愚者鈍者非法器の者、國王は臣下よりも人をたすくる人、父母は佗人よりも子をあらはれむ者、日月は衆星より暗を照す者、法華經機に協はずんば況や餘經は助け難しと思食せ、又釋迦如來と阿彌陀如來藥師多寶佛觀音勢至普賢文殊等の一切の諸佛菩薩は、我等が慈悲の父母、此の佛菩薩の衆生を教化する慈悲の極理は



二十

唯法華經にのみとどまれりと思食せ  
(十一唱題抄)  
 種種の寶藏有りと、諸佛菩薩の萬行萬善、諸波羅蜜の功德、妙法に納まるに譬ふ、大身の衆生の所居の住處とは、佛菩薩大智慧あるが故に、大身の衆生と名く、大身大心大莊嚴大調伏大說法大勢大神通大慈大悲、わのづから法華經より生ずるが故なり  
(三同 一 鹹味抄)

廿一

此の妙法蓮華經の五字は萬法能生の父母なり、生養成榮又復此の如し、仍て釋には妙を以て本とすと釋せり、三世十方の諸佛は妙法華經を以て父母とし給へり、此の故に四聖を供養するより法華經を持つは勝れたり、七寶は世間の財寶なり、四聖は滅歸する佛菩薩羅漢なり  
(百内記)

廿二

文の心は壽量品を説かざれば末代の凡夫皆惡道に墮せん

等なり、壽量品に云く、是の好き良藥を今留めて此に在く等云云、文の心は上に過去の事を説くに似たる様なれども、此文を以て之を案ずるに滅後を以て本と爲し、先づ先例を引くなり  
(九法華取要抄)

廿三

十方世界の諸佛は自我偈を師として、佛に成せ給ふ、世間の人の父母の如し、今法華經壽量品を持つ人は諸佛の命を續ぐ人也、我得道なりし經を持つ人を捨給ふ佛あるべしや、若し之を捨給はば佛還て我身を捨給ふなるべし、之を以て思ふに、田村利仁なんどの様なる兵を三千人生たらん女人一人有るべし、此の女人を敵とせん人は、此の三千人の將軍を敵に受るにあらずや、法華經の自我偈を持つ人を敵とせんは三世の諸佛を敵とするになるまじき歟、今の法華經の文

字は皆生身の佛也我等は肉眼なれば文字と見る也譬へは  
 恒河を餓鬼は火と見人は水と見天人は甘露と見る水は一  
 なりと雖も果報に随つて所見各別なるが如し此法華經の  
 文字は盲目の者は之を見ず肉眼は黒色と見二乗は虚空と  
 見菩薩は種種の色と見佛種純熟せる人は佛と見奉るされ  
 ば經文に若能く持つもの有らば則ち佛身を持つなり等云  
 云天台云く稽首妙法蓮華經一帙八軸四七品六萬九千三八  
 四一文文是れ眞佛なり眞佛說法して衆生を利すと書れ  
 て候之を以て之を案ずるに法蓮法師は毎朝口より金色の  
 文字を出現す此の文字の數は五百十字也一一の文字變じ  
 て日輪となり日輪變じて釋迦如來となり給ひ大光明を放  
 て大地を照徹し三惡道無間大城を照し乃至東西南北上方

廿四  
 佛滅度後二千二百餘年が間恐らくは天台智者大師も一切  
 世間多怨難信の經文をば行じ給はず數數見擯出の明文は  
 但日蓮一人なり一句一偈皆與授記は我なり  
 (廿五 法蓮抄)  
 の孝養にては候へ  
 識也とて娑婆世界に向つてねがませ給ふらめ是れこそ實  
 と成らん足と成らん手と成らんとこそ慇懃に語らせ給ふ  
 らめ其の時過去聖靈は我が子息法蓮は子にはあらず善知  
 識也とて娑婆世界に向つてねがませ給ふらめ是れこそ實  
 の孝養にては候へ  
 佛滅度後二千二百餘年が間恐らくは天台智者大師も一切  
 世間多怨難信の經文をば行じ給はず數數見擯出の明文は  
 但日蓮一人なり一句一偈皆與授記は我なり  
 (廿五 法蓮抄)  
 に向つては非想非非想にも登り何れの處にも過去聖靈の  
 れはさん處まで尋ね行き給ふて彼の聖靈に語り給ふべし  
 我をば誰とか思食す我は是れ汝が子息法蓮が朝毎に誦す  
 る所の法華經の自我偈の文字也此文字汝が眼と成らん耳  
 と成らん足と成らん手と成らんとこそ慇懃に語らせ給ふ  
 らめ其の時過去聖靈は我が子息法蓮は子にはあらず善知  
 識也とて娑婆世界に向つてねがませ給ふらめ是れこそ實  
 の孝養にては候へ  
 (廿五 法蓮抄)

廿五 法華經は一文一句なれども耳にふる者は既に佛になるべきと思ひて、いたう第六天の魔王もなげき思ふ故に、方便をまはして留難をなし經を信ずる心を捨しめんと誑る

(四十四思妙)

廿六 譬へば、四天下の内に四洲あり、其中の一切の萬物の月に移りてすこしもかくるゝ事なし、經も又是の如し、其經の中の法門其經の題目の中にあり、阿含經の題目は一經の所詮無常の理をおさめたり、外道の經の題目のアウの二字にすぐれたる事百千萬倍也、九十五種の外道阿含經の題目を聞いてみな邪執を倒し、無常の正路にれもひきぬ、般若經の題目を聞いては體空但中不但中の法門をさと、華嚴經の題目を聞人は、但中不但中のさとあり、大日經方等般若經の題目

を聞人は、或は折空、或は體空、或は但空、或は不但空、或は但中不但中の理をばさとれども、いまだ十界互具百界千如三千世間の妙覺の功德をばさかず、その詮を説ざれば法華經より外は理即の凡夫也、彼の經の佛菩薩はいまだ法華經の名字即に及ばず、何に況んや題目をも唱へざれば、觀行即にいたるべしや、故に妙樂大師記に云く、若し超入の如是に非んば安ず、此の經の所聞と爲ん云、彼彼の諸經の題目は八教の内也、網目の如し、此の經の題目は八教の網目に超て大綱と申す物也、今妙法蓮華經と申す人は、その心はしらざれども、法華經の心をうるのみならず、一代の大綱を覺り給へり、例せば、一二三歳の太子位につき給ひぬれば、國は我が所領也、攝政關白、已下は我が所從なりとはさとらせ給はねど

も、なにも此の太子の物也、譬へば小兒は分別の心なければ、  
も悉母の乳を口にのみぬれば自然に生長す (十二曾谷抄)

廿七

問ふて云く、法華經一部八卷二十八品の中に何物か肝心な  
る答へて云く、華嚴經の肝心は大方廣佛華嚴阿含經の肝心  
は佛說中阿含經大集經の肝心は大方等大集經般若經の肝  
心は摩訶般若波羅密經雙觀經の肝心は佛說無量壽經觀經  
の肝心は佛說觀無量壽經阿彌陀經の肝心は佛說阿彌陀經、  
涅槃經の肝心は般若經、かくのごとく一切經は、皆如  
是我聞の上の題目、其經の肝心なり、大は、大に、つき小は、小に  
つけて題目をもつて肝心とす、大日經金剛頂經蘇悉地經等  
亦復かくのごとし、佛又かくのごとし、大日如來、日月燈明佛  
然燈佛大通佛雲雷音王佛此等も又名の内に其佛の種種の

徳をそなへたり、法華經も亦もつてかくのごとし、如是我聞  
の上の妙法蓮華經の五字は即ち一部八卷の肝心亦復一切  
經の肝心一切の諸佛菩薩二乘天人脩羅龍神等の頂上の正  
法なり (内報風抄)

廿八

問ふ汝何ぞ一念三千の觀門を勸進せずして、唯題目計を唱  
へしむるや、答へて曰く、日本の二字に六十六國の人畜財を  
攝盡して一も残さず、月氏の兩字に豈七十箇國なからんや、  
妙樂云く略して經題を擧ぐるに、玄に一部を收む、又云く畧  
して界如を擧ぐれば、具に三千を攝す、文殊師利菩薩阿難尊  
者三會八年の間の佛語之を擧て妙法蓮華經と題し、次下に  
傾解して云く、如是我聞と云、云問ふ其義を知らざる人唯南  
無妙法蓮華經と唱へて解義の功德を具するや否や、答ふ小

兒乳を合むに其味を知らざれども自然に身を益す者婆伽  
 妙藥誰か辨へて之を服せる水心なければども火を消し火は  
 物を焼く豈覺わらん龍樹天台皆此意なり重て示すべし問  
 ふ何んが故を題目に萬法を合ひや答ふ章安云く蓋し序王  
 とは經の玄意を叙す玄意は文の心を述べ文の心は述本に  
 過たるは莫し妙樂云く法華の文の心を出して諸教の所以  
 を辨す云濁水心なければども月を得て自から清めり艸木  
 雨を得る豈覺ありて花ならんや妙法蓮華經の五字は經文  
 にあらず其義にあらず唯一部の意のみ初心の行者其心を  
 知らざれども而も之を行ずるに自然に其意に當るなり

(十信五品抄)

廿九 疑て云く二十八品の中に何か肝心なる答へて曰く或は云

く品品皆事に隨つて肝心也或は云く方便品壽量品肝心也  
 或は云く方便品肝心也或は云く壽量品肝心也或は云く開  
 示悟入肝心也或は云く實相肝心也問ふて云く汝が心如何  
 答へて曰く南無妙法蓮華經肝心なり其の證如何答へて云  
 く阿難と文殊とは八年が間此の法華經の無量の義を一句  
 一偈一字も残さず聽聞してありしが佛の滅後に結集の時  
 九百九十九人の阿羅漢が筆を染てありしに妙法蓮華經と  
 かゝせて如是我聞と唱へさせ給ひしは妙法蓮華經の五字  
 は一部八卷二十八品の肝心にあらずやされば過去の燈明  
 佛の時より法華經を講せし光宅寺の法雲法師は如是とは  
 將に所聞を傳へんとし前題に一部を擧ぐる也等云云靈山  
 に在のあたりさこしめしてありし天台大師は如是とは所

聞の法體也等云云章安大師の云く記者釋して曰く蓋し序王とは經の立意を叙し玄意は文の心を述ぶ等云云此釋に文の心といふは題目は法華經の心也妙樂大師云く一代の教法を収むると法華の文心より出づ等云云天竺は七十箇國也總名は月氏國日本は六十箇國總名は日本國月氏の名の内に七十箇國乃至人畜珍寶みなあり日本と申す名の内に六十六箇國あり出羽の羽も奥州の金も乃至國の珍寶人畜乃至寺塔も神社もみな日本と申す二字の名の内に攝れ

(七内報恩抄)

三十

南無妙法蓮華經と申すは、一代の肝心たるのみならず法華經の心也體也所詮也

(外會谷抄)

卅一

法華經と申す御經は別の事も候はず我は過去に五百塵點

劫より先の佛又舍利弗等は未來に佛になるべしと之を信せざる者は無間地獄に墮す我のみ此申すには非ず多寶佛も證明し十方の諸佛も舌を出して此仰せ候地涌千界の菩薩文殊觀音梵天帝釋日月四天十羅刹女法華經の行者を守護し給はんと説れたりされば佛に成る道には別の様なし過去の事未來の事を申し當て候が實の法華經の行者にては候也

(三十三清澄寺大衆抄)

卅二

妙法蓮華經妙とは天台玄義の一に云く云ふ所の妙とは妙は不可思議に名くるなり又云く秘密の奥藏を發く之を稱して妙と爲す又云く妙とは最勝修多羅甘露の門なり故に妙と言ふなり法とは又云く言ふ所の法とは十界十如權實の法なり又云く權實之正軌を示す故に號けて法と爲す運

華とは、又云く蓮華とは權實の法に譬ふるなり、又云く、久遠の本果を指し之に論ふるに蓮を以てし、不二の圓道を會し之に譬ふるに華を以てす、經とは、又云く聲佛事を爲す之を稱して經と爲すと  
(十三一代大意抄)

第三章 總持の信仰に約す

一 汝等但能く法華の名を受持せん者を擁護せんすら福量るべからず  
(陀羅尼品)

二 法を聞いて歡喜して乃至一言を發せば則ちこれ已に一切三世の佛を供養せるなり  
(方便品)

三 是の經を聞くことを得て歡喜し、信樂し、希有の心を生じて受持し、讀誦し、書寫し、解説し、説の如く修行し、菩提心を起し

四 諸の善根を起し、大悲の心を起して一切の苦惱を度せんと欲せば、未だ六波羅密を修行することを得ずと雖も六波羅密自然に在前せん  
(十功德品)

大經に云く、薩とは具足の義に名く等云、無依無得大乘四論、玄義記に云く、妙とは譯して六といふ、胡法六を以て具足の義と爲すなり等云、云、吉藏の疏に云く、妙とは翻じて具足と爲す等云、天台の玄義入に云く、薩とは梵語なり、此には妙と翻するなり等云、付法藏の第十三眞言華嚴諸宗の元祖、本地は法雲自在王如來、迹に龍猛菩薩、初地の大聖の大智度論、千卷の肝心に云く、薩とは六なり等云、妙法蓮華經と申すは、漢語なり、月氏には薩達磨、芬陀利伽蘇多攬と申す、善無畏三藏の法華經肝心の眞言に云く、曇謨三曼陀沒駄南





七

玄意を叙す玄意は文の心を述ぶ此釋の心は妙法蓮華經と申すは文にあらす義にあらす一經の心なりと釋せられて題目をはなれて法華經の心を探る者は、猿をはなれて肝をたづねしはかなき龜也山林をすて、果を大海の邊にもとめし猿猴也はかなしはかなし

(外 曾谷抄)

佛諸の羅刹女に告て言く善哉善哉汝等但能く法華の名を受持する者を擁護せん福量るべからずと云へり此文の意は、十羅刹の法華の名を持つ人を護らんと誓言を立給ふを、大覺世尊讚て言く善哉善哉汝等南無妙法蓮華經と受持ん人を守らん功德いくら程とも計がたくめてたき功德也神妙也と仰せられたる文也是我等衆生の行住坐臥に南無妙法蓮華經と唱ふべしと云ふ文也

(十二法華初心成佛抄)

八

又若やの事候はばくらき闇に月の出るが如く妙法蓮華經の五字月と露れさせ給ふべし其月の中には釋迦佛十方の諸佛乃至前に立せ給ひし御子息の露れさせ給ふべしと思召せ

(外 淨藏淨眼抄)

九

玄義の全體宗用教の五重玄は妙法蓮華經の五字の功能を判釋す五重玄を釋する中の宗の釋に云く網維を提ぐるに目として動かさること無く衣の一角を索くに縷として來らざること無きが如しと意は此の妙法蓮華經を信仰し奉る一行に功德として來らざる事なく善根として動かざる事なし譬は網の目無量なれども一つの大綱を引くに動かざる目もなく衣の絲筋巨多なれども一角を取るとに絲筋として來らざることなきが如しと云ふ義也

(外 愚問答抄)

第四章 觀念の攝得に約す

一 夫れ以れば妙法蓮華經は一代の觀門を一念に統べ十界の  
依正を三千につづめたり (一)聖愚問答抄

二

今妙法蓮華經と申し候は、一部八卷二十八品の功德を五字  
の内に收め候、譬へば如意寶珠の玉に萬の寶を收めたるが  
如し、一塵に三千を盡す法門是れ也南無と申す字は敬心也  
隨心也故に阿難尊者は一切經の如是の二字の上に南無等  
云云南岳大師云く南無妙法蓮華經云云天台大師云く稽首  
妙法蓮華經云云 (二)内房女房抄

三

妙法蓮華經の五字の寶藏の中より一念三千の如意寶珠を  
取出して、三國の一切衆生に與へ給へり、此法門は漢土に始

四

るのみならず、月氏の論師も明し給はぬ事也 (三)兄弟抄  
問ふて云く法華經第一方便品に云く諸法實相乃至本末究  
竟等云云此の經文の意如何答へて云く下地獄より佛界ま  
ての十界の依正の當體悉く一法ものこらず妙法蓮華經の  
すがた也と云ふ經文也 (四)諸法實相抄

五

問ふ妙法蓮華經とは其體何物ぞや答ふ十界の依正即ち妙  
法蓮華の當體なり問ふ若し爾らば我等が如き一切衆生も  
妙法の全體なりと云はるべきか答ふ勿論なり經に云く所  
謂諸法乃至本末究竟等云云妙樂大師の云く實相は必ず諸  
法諸法は必ず十如十如は必ず十界十界は必ず身土云云天  
台云く十如十界三千の諸法は今經の正體なるのみ云云南  
岳大師の云く如何なるを名けて妙法蓮華となすや答ふ妙

六

とは衆生妙なるが故に、法とは即ちこれ衆生法なるが故に  
 と云云又天台釋して云く衆生法妙と云云問ふ一切衆生の  
 當體即妙法の全體ならば地獄乃至九界の業因果果も皆之  
 れ妙法の法體なりや答ふ法性の妙理に染淨の二法あり染  
 法薰じて迷となり淨法薰じて悟となる悟は即ち佛界なり  
 迷は即ち衆生なり此の迷悟の二法は二なりと雖も然も法  
 性眞如の一理なり譬ば水精の玉の日輪に向へば火を取り  
 月輪に向へば水を取る玉の體は一なれども縁に随つて其  
 の功同じからざるが如し眞如の妙理も亦復是の如し一妙  
 眞如の理と雖も惡縁に遇へば迷となり善縁に遇へば悟  
 となる悟は即ち法性なり迷は即ち無明なり(十三宮體教妙)  
 問ふ天台大師妙法蓮華の當體譬諭の二義を釋し給へり爾

れば其の當體譬諭の蓮華の様は如何答ふ譬諭の蓮華とは  
 施開廢の三釋委しく之を見るべし當體蓮華の釋は玄義第  
 七に云く蓮華は譬にあらざる當體に名を得類せば劫初の如  
 し萬物名なし聖人理を觀じ準則して名を作る又云く今蓮  
 華の稱は是れ假喩にあらざる乃ち是れ法華の法門なり法華  
 の法門は清淨にして因果微妙なれば此の法門を名けて蓮  
 華となす即ち是れ法華三昧の當體の名にして譬喩にあら  
 ず又云く問ふ蓮華定て是れ法華三昧の蓮華なりや定て是  
 れ華艸の蓮華なりや答ふ定て是れ法蓮華なり法蓮華解し  
 難し故に艸花を喩となす利根は名に即して理を解し譬喩  
 を假らず但だ法華の解を作す中下は未だ悟らず譬を須  
 て乃ち知る易解の蓮華を以て難解の蓮華を喩ふ故に三周

七  
 の説法ありて上中下根に返す上根に約すれば是れ法の名、  
 中下に約すれば是れ譬の名なり、三根合論し雙べて法譬を  
 標す、是の如く解する者は誰と諍ふことをなさんや云、此  
 の釋の意は至理は名なし、聖人理を觀じて萬物に名を付く  
 る時、因果俱時不思議の一法之れあり、之を名けて妙法蓮華  
 とす、此の妙法蓮華の一法に十界三千の諸法を具足して  
 闕減なし之を修行する者、佛因佛果同時に之を得るなり、聖  
 人此の法を師と爲して修行覺道し、妙因妙果俱時に感得し  
 給ふ、故に妙覺果滿の如來と成り給ひしなり、(西當體義抄)  
 文字は是れ一切衆生の色心不二の質也、汝若し文字を立て  
 ざれば、汝が色心をも立つ可からず、汝六根を離れて禪の法  
 門一句答へよと責む可き也、

(外諸宗問答抄)

八  
 夫法華經第一方便品に云く、諸佛の智慧は甚深無量なり、云  
 釋に云く、境淵無邊なる故に甚深と云ひ、智水測り難き故  
 に無量と云ふと、抑此の經釋の意は佛になる道は境智の二  
 法にあらざや、されば境と云は萬法の體を云ふ體と云は自  
 體顯照の姿を云也、而るに境の淵はとりなくふかき時は、智  
 慧の水ながるゝ事つゝがなし、此境智合しぬれば、即身成佛  
 する也、法華以前の經は、境智各別にして、而も權教方便なる  
 が故に成佛せず、今法華經にして、境智一如する間、開示悟入  
 の四佛知見を悟つて成佛する也、此内證に聲聞辟支佛、更に  
 及ばざるところを、次下に一切の聲聞辟支佛の知る能はざ  
 る所と説也、此境智の二法は何物ぞ、但南無妙法蓮華經の五  
 字也、此五字を地涌の大士を召出して、結要付屬せしめ給ふ、

九

是を本化付属の法門とは云也  
(二十五 曾谷抄)  
 所謂諸佛の誠諦得道の最要は只是れ妙法蓮華經の五字也  
 檀王は寶位を退き龍女が蛇身を改めしも只此の五字の致  
 す所也夫以れば今の經は受持の多少をば一偈一句と宣べ  
 修行の時刻をば一念隨喜と定めたり凡る八萬法藏の廣き  
 も一部八卷の多きも只是れ五字を説んため也靈山の雲の  
 上鷲峯の霞の中に釋尊要を結び地涌付属を得ることあり  
 しも法體は何事ぞ只此の要法に在り天台妙樂六千張の疏  
 玉を連ね道邃行滿數軸の釋金を並たるも併しながら此の  
 義趣を出す  
(引聖 愚同答抄)  
 問ふ劫初より已來何人か當體の蓮華を證得せしや答ふ釋  
 尊五百塵點劫の當初此の妙法の當體蓮華を證得して世世

十

十一

番番に成道を唱へ能證所證の本理を顯し給へり今日又中  
 天竺摩訶陀國に出世して此の蓮華を顯さんと欲すに機な  
 く時なし故に一法の蓮華に於て三の草華を分別し三乘の  
 權法を施し擬宜誘引して四十餘年なり  
(三 富體發抄)  
 正しく久遠實成の一念三千の法門は前四味並に法華經の  
 迹門十四品まで秘させ給ひて有しが本門正宗に至つて壽  
 量品に説顯し給へり此の一念三千の寶珠をば妙法五字の  
 金剛不壞の袋に入れて末代貧窮の我等衆生の爲に残し留せ  
 給ひし也正法像法に出させ給ひし論師人師の中に此大事  
 を知らず唯龍樹天親こそ心の底に知せ給ひしかども色に  
 も出させ給はず天台大師立文止觀に秘せんと思召ししか  
 ども末代の爲にや止觀十章第七正觀の章に至つて知書せ

給ひたりしかども蒲葉に釋を設けてさて止み給ひぬ但し  
理觀の一分を示して事の三千をば斟酌し給ふ彼天台大師  
は迹化の衆也此日蓮は本化の一分なれば盛に本門の事の  
分を弘むべし  
(十二木田左衛門尉御返事)

第五章 結歸本佛の三輪に約す

- 一 父子等の苦惱すること是の如くなるを見て諸の經方に依つて好き薬草の色香美き味皆悉く具足せるを求めて擣き筵ひ和合して子に與へて服せしむ而も是の言を作さく此の大良薬は色香美き味皆悉く具足せり汝等服すべし速に苦惱を除いて復衆の患なけんと (諸品)
- 二 何に況んや讀誦し受持せん者をや斯の人は則ちこれ如來

を頂戴し上るなり

(分別功德品)

- 三 佛子此の地に住すれば則ち是れ佛受用し給ふ常に其の中に在まして經行し若は坐臥し給はん (分別功德品)
- 四 能く此の經を持たん者は則ちこれ已に我を見亦多寶佛及諸の分身者を見又我今日教化せる諸の菩薩を見上らん (神力品)

- 五 法華經を受持し讀誦せん者我身を見ることを得て甚だ大に歡喜して轉た復精進せん (勸發品)

- 六 我れ佛道の爲に無量の土に於て始よりに至るまで廣く諸經を説く而も其の中に於て此の經第一なし能く持つことあらば則ち佛身を持つなり (寶塔品)

- 七 若し此の經を説かん時人あつて惡口して罵り刀杖瓦石を

八

加ふとも佛を念ふが故に應に忍ぶべし (法師品)

九

の時に爲に清淨の光明の身を現せん (法師品)

十

誦せば皆我身を見ることを得ん (法師品)

十一

大乘に因るが故に大士を見ることを得、大士の力に因るが故に諸佛を見上ることを得たり (結經)

十二

の神力は是の如く無量無邊不可思議なり、若し我是の神力

を以て無量無邊百千萬億阿僧祇劫に於て屬累の爲の故に此の經の功德を説くとも猶盡すこと能はじ、要を以て之を言はじ、如來の一切の所有の法、如來の一切の自在の神力、如來の一切の秘要の藏、如來の一切の甚深の事、皆此の經に於て宣示顯説す等云云、天台云く、爾時佛告上行より下は第三結要付屬なり云云、傳教云く、又神力品に云く、以要言之、如來一切所有之法、乃至宣示顯説、經上文明かに知んぬ、果分一切所有の法、果分一分自在の神力、果分一切秘要の藏、果分一切甚深の事、皆法華に於て宣示顯説するなり等云云、此の十神力は妙法蓮華經の五字を以て上行安立行淨行無邊行等の四大菩薩に授興し給ふなり、前きの五神力は在世のため後の五神力は滅後のためなり、爾りと雖ども再往之を論ずれば

一向に滅後の爲なり故に次下の文に云く佛滅度の後に能く是の經を持たんとを以ての故に諸佛皆歡喜して無量の神力を現じ給ふ等云云 (内觀心本尊抄)

十三 釋尊の因行果徳の二法は妙法蓮華經の五字に具足す我等此の五字を受持すれば自然に彼の因果の功徳を譲り與へ給ふ (全上)

十四 佛大慈悲を起して妙法の五字の袋の内に此珠をつゝみて未代幼稚の頸に懸さしめ給ふ (全上)

十五 今の遣使還告は地涌なり是好良薬とは壽量品の肝要たる名體宗用教の南無妙法蓮華經是れなり (全上)

十六 疏の十に云く爾時上行より下は是れ第三に結要付屬なり云云又云く結要に四句あり一切法とは一切皆是れ佛法なり

り此は一切皆妙の名を結するなり一切力とは通達無礙にして八自在を具す此れ妙の用を結するなり一切秘藏とは一切處に遍して皆是れ實相なり此れ妙の體を結するなり一切深事とは因果は是れ深事なり此れ妙の宗を結するなり皆於此經宣示顯説とは總じて一經を結するに唯四ならくのみ其の樞柄を撮て之を授與す (外結要付屬抄)

十七 問ふて云く總説の五重玄如何答へて云く總説の五重玄とは妙法蓮華經の五字即五重玄なり妙は名法は體蓮は宗華は用經は教なり又總説の五重玄に二種あり一には佛意の五重玄二には機情の五重玄なり (十八八四滿抄)

十八 所詮一言とは妙法是なり問ふ何を以て妙法は一心三觀に勝れたりと云事を知ることを得るや答ふ妙法は所詮の果



徳なり、三觀は行者の觀門なる故なり、此の妙法を佛説て言  
く道場に得る所の法我法は妙にして思ひ難し、是の法思量  
すべきにあらず、言を以て宣ふべからずと云云、天台云く妙  
とは不可思議言語道斷、心行所滅、法とは十界十如因、果不二  
の法なりと云云、三諦と云ふも三觀と云ふも三千と云ふも  
共に不思議法とは云へども、天台の已證天台の御思慮の及  
ぶ所の法門なり、此の妙法は諸佛の師なり、今の經文の如き  
は久遠實成の妙覺極果の佛の境界にして、爾前迹門の教主  
諸佛菩薩の境界にあらず、經に唯佛與佛乃能究盡とは迹門  
の界如三千の法門をば迹門の佛の當分に究盡する邊を説  
けるなり、本地難思の境智の妙法は迹佛等の思慮に及ばず  
何に況んや菩薩凡夫をや

(芥子立正觀抄)

十九

法蓮房の慈父、十三年孝養の御返事に方便品の長行書進候  
先に進じ候し自我偈に相副て讀たまふべし、此の經の文字  
は皆悉く生身妙覺の御佛也、然れども我等は肉眼なれば文  
字と見る也、例せば餓鬼は恆河を火と見る、人は水と見る、天  
人は甘露と見る、水は一なれども果報に随つて別別也、此の  
經の文字は盲眼の者は之を見ず、肉眼の者は文字と見る、二  
乗は虚空と見る、菩薩は無量の法門と見る、佛は一一の文字  
金色の釋尊と御覽有べき也、即持佛身とは是れ也、されども  
僻見の行者は加様に目出度渡らせ給を破し奉る也、唯相構  
へ相構て異念無く一心に靈山淨土を期せらるべし、心の師  
とはなるとも心を師とせざれどは六波羅密經の文ぞかし、  
委細は見參の時を期し候、恐恐謹言

(芥子會谷抄)

二十 此佛の御功德をば法華經を信ずる人にゆづり給ふ例せば  
 悲母の食ふ物の乳となりて赤子を養ふが如し、今此の三界  
 は皆是我有なり其中の衆生は悉く是れ吾子なり等云云教  
 主釋尊は此功德を法華經の文字となして一切衆生の口に  
 なめさせ給ふ、赤子の水火をわきまへず、毒と薬とを知らざ  
 れども乳を含めば身命をつなくが如し  
 (法華經抄)

# 第五篇 人身

## 第一章 通説

- 一 身はこれ機關の主、塵の風に隨ふて轉ずるが如く、六賊中に  
 遊戲すること自在にして罣礙無し (結經)
- 二 身は殺盜婬心は諸の不善を念ふて十惡業及五無間を造る  
 こと、猶猿猴の如く亦繻膠の如し、處々に貪著して遍く一切  
 の六情根の中に至る (結經)
- 三 諸の衆生是は此是は彼是は得是は失と横計して不善の心  
 を起し衆の惡業を造り七趣に輪廻して諸の苦毒を受け無  
 量億劫にも自ら出づること能はず (徳行品)
- 四 諸の衆生を見るに生老病死憂悲苦惱の爲に燒煮せられ亦

五欲財利を以ての故に種々の苦を受け、又貪著し追求するを以ての故に現には衆苦を受け、後には地獄畜生餓鬼の苦を受く。天上に生れ及人間に在つては貧窮困苦愛別離苦怨憎會苦是の如き等の種々の諸苦あり、衆生その中に没在して歡喜し遊戯して覺めず知らず驚かず怖れず亦厭を生ぜず解脫を求めず此の三界の火宅に於て東西に馳走せり

五

若し人小智にして深く愛欲に著せん此等の爲の故に苦諦を説く (譬喩品) (全上)

六

諸苦の所因は貪欲を本となす (全上)

七

放逸にして五欲に著し惡道の中に墮ちなん (壽量品) (全上)

八

心根は猿猴の如く暫も停まる時あること無し若し折伏せ

九

んと欲せば當に勤めて大乘を誦し佛大覺の身力無所畏の所成を念ずべし (結經)

本覺の磨りを以て我が心性を糾せば生ずべき初も無し故に死すべき終りも無し既に生死を離るゝ心法に非ずや劫火にも焼けず水災にも朽ちず劍刀にも切られず弓箭にも射られず芥子の中に入れても芥子も廣まらず心法も縮めず虚空の中に満れども虚空も廣からず心法も狭からず善に背くを惡と云ひ惡に背くを善と云ふ故に心の外に善なく惡なし此の善惡を離るを無記と云ふなり善惡無記此外には心なく心の外には法なし故に善惡も淨穢も凡夫も聖人も天地も大小も東西も南北四維も上下も言語道斷も心行所滅も心に分別して思ひ言ひ顯す言語なれば心の外に

分別もなし、分別も無れば言ばと云ふは心の思ひを釋かし  
て聲を顯すを云ふなり、凡夫は我が心に迷ふて知らず覺ら  
ざるなり、佛は之を悟り顯はして神通と名るなり、神通とは  
神ひの一切の法に通じて礙げなきなり、此自在の神通は一  
切の有情の心にて有るなり、故に狐狸も分分に通を現すこ  
と皆心の神の分分の悟りなり、此心の一法より國土世間も  
出來る事なり、一代聖教は此事を説くなり、此を八萬四千の  
法藏と云ふなり、是皆悉く一人身中の法門にてあるなり、然  
れば八萬四千の法藏は我身一人が日記文書なり

(十) 總勸文抄

十

有情輪廻生死六道と申して、我等が天竺に於て師子と生れ  
漢土日本に於て虎狼野干と生れ、天には鷓鴣地には鹿蛇と

生れしこと數をしらず、或は鷹の前の雉猫の前の鼠と生れ、  
生ながら頭をつゝさししむらをかまれしこと數をしらず、  
一劫が間の身の骨は須彌山よりも高く、大地よりも厚かる  
べし、惜き身なれどと云ふに甲斐なく奪れてこそ候けれ、然  
らば今度法華經の御爲に身を捨て命をも奪るれば、無量無  
數劫の間の思ひ出なるべしと思ひ切給ふへし

(三) 莊司入道抄

十一

法華經第二に云く、常に地獄に處すること、園觀に遊ぶが如  
く、餘の惡道に在ること、己が舍宅の如し、云文の心は常に  
地獄に處する事は、そのふに遊ぶがことし、餘の惡道にある  
事は、己が家の如しといへり

(大) 兄弟抄

十二

第一に受け難き人身値ひ難き佛法なるを明すとは、涅槃經

三十三に云く、爾時に世尊地の少の土を取て之を爪の上に置き迦葉に告て言く、是の土多き耶十方世界の地の土多きや、迦葉菩薩佛に白して言く、世尊爪の上の土は十方所有の土に比べず善男子人あり身を捨て還て人身を得、三惡の身を捨て人身を受ることを得、諸根完具し中國に生じ、正信を具足して能く道を修習し、道を修習し已て能く正道を修し、正道を修し已て能く解脱を得、解脱を得已て能く涅槃に入るは、爪の上の土の如く、人身を捨て已て三惡の身を得、三惡の身を捨て、三惡の身を得、諸根具せず邊地に生じ、邪倒のを見を信じて邪道を修習し、解脱常樂の涅槃を得ざるもの十方世界所有の地の土の如し(經文)此の文は多く法門を集めて一具と爲せり、人身を捨て、還て人身を受るは爪の上の土の如く、人身を捨て三惡道に墮るは十方の土の如し、三惡の身を捨て、還つて三惡の身を得るは十方の土の如し、人身を受るは十方の土の如く、人身を受けて六根を缺けざるは爪の上の土の如し、人身を受けて六根を缺けざるは爪の上の土の如し、中國に生ずるは爪の上の土の如し、中國に生ずるは十方の土の如く、佛法に値ふは爪の上の土の如し、又曰く一闍提とならず善根を斷せず、是の如き等の涅槃經典を信ずるは爪の上の土の如く、乃至一闍提となつて諸の善根を斷じ是經を信ぜざるは十方世界の所有の地の土の如し(經文)此の文の如きは法華涅槃を信せず一闍提と作るは十方の土の如く、法華涅槃を信ずるは爪の上の土の如く

土の如く、人身を捨て三惡道に墮るは十方の土の如し、三惡の身を捨て、還つて三惡の身を得るは十方の土の如し、人身を受るは十方の土の如く、人身を受けて六根を缺けざるは爪の上の土の如し、人身を受けて六根を缺けざるは爪の上の土の如し、中國に生ずるは爪の上の土の如し、中國に生ずるは十方の土の如く、佛法に値ふは爪の上の土の如し、又曰く一闍提とならず善根を斷せず、是の如き等の涅槃經典を信ずるは爪の上の土の如く、乃至一闍提となつて諸の善根を斷じ是經を信ぜざるは十方世界の所有の地の土の如し(經文)此の文の如きは法華涅槃を信せず一闍提と作るは十方の土の如く、法華涅槃を信ずるは爪の上の土の如く

し、此の經文を見て彌々感涙押へ難し

(十守護國家論)

十三 汝後生をば餘處の事とのみ思ふあわれさ、我が身を思はぬ者かな、人間に生を受る事は、盲龜の浮木に値へるが如しとこそ佛は説給ふ、恆沙の宿善を俱して、希に受たりし人間に、尙又得難き佛法に値ふ事を得たりしに、佛道修行をばなさず、夢幻の如くなる一旦の身を思ふて、生涯空く暮して、今かゝる憂目を見ることの愚さよ、汝さても佛法結縁をば何計なしたりけん、説法なんどの聽聞をもせざりしや

(十九王讚對抄)

十四 一切衆生法性眞如の都を迷ひ出て、妄想顛倒のやみに入りしより已來、身口意の三業になすところ、善根は少く、惡業は多し、されば經文には一人一日の中に八億四千念念念の中

に作す所皆是れ三途の業なり等云我等衆生三界二十五有のちまたに輪廻せし事鳥の林に移るが如く、死しては生じ生じては死し車の場に回るが如く、始め終りもなく、死し生ずる惡業深重の衆生也、爰を以て心地觀經に云く有情輪回して六道に生ずること猶車輪の始終無きが如く、或は父母となり男女となり、生々世々互に恩有り等云法華經第二の卷に云く三界は安きこと無し、猶火宅の如く、衆苦充滿せり云涅槃經二十二に曰く菩薩摩訶薩諸の衆生を觀るに、色香味觸の因縁の爲の故に昔無量無數劫より以來常に苦惱を受く、一一の衆生一劫の中に積む所の身の骨は玉舍城の毗富羅山の如く、飲む所の乳汁は四海の水の如く、身より出す所の血は四海の水より多く、父母兄弟妻子眷屬の命

終に涕泣して出す所の目涙は四大海の水より多し地の艸木を盡して四寸籌となして以て父母の恩を數ふるに亦盡すこと能はじ無量劫より已來或は地獄畜生餓鬼に在つて受る所の行苦稱計るべからず亦一切衆生の骸骨をや云云是の如くいたづらに命を捨るところの骸骨は毗富羅山よりも多し恩愛あはれみの涙は四大海の水よりも多ければも佛法の爲には一骨をもなげず一句一偈を聽聞して一滴の涙をもおとさずゆへに三界の籠樊を出ずして二十五有のちまたに流轉する衆生にて候也然る間如何として三界を離るべきと申すに佛法修行の功方に依て無明のやみはれて法性眞如の覺を開くべく候

十五 涅槃經に云く人の命の停らざること山水にも過たり今日

(廿五女人成佛抄)

存すと雖も明日保ち難し摩耶經に云く譬へば旃陀羅の羊を駈て屠家に至るが如く人の命も亦是の如く歩歩死地に近づく矣法華經に云く三界は安きこと無し猶父宅の如し衆の苦充滿して甚だ怖畏すべし等云此等の經文は我等が慈父大覺世尊未代の凡夫をいさめ給ひいとけなき子どもをさし驚かし給へる經文也然りといへ共須臾も驚く心なく刹那も道心を發さず野邊に捨られなば夜の中にはだかになるべき身をかざらんが爲にいとまを入れ衣を重ねんとはげむ命終りなば三日の内水と成て流れ塵と成て地にまじはり煙と成て天に登り跡も見えず成ぬべき身を養はんとして多くの財をたくはふ此ことは事は事ふり候ひぬ

(大松野抄)

十六 南條七郎五郎殿の御死去の御事、人は生れて死る習ひとは智者も愚者も上下一同知て候へば、始て歎くべし、驚くべしとは覺えぬ由、我も存じ人にも教へ候へども、時に當て夢歎幻歎、日蓮さへいまだわきまへがたく候、まして母の如何が歎かれ候らん、父母にも兄弟にもねくれはて、いとをしき男に過別れたりしかども、子供あまたおはしませば、心なきさみてこそ御坐候らん、いとねしき子の而も男子にて、みめかたちも人に勝れ、心もかひがひしく見ぬしかば、外の人人もすすしくこそ見進らせ候しに、あやなくつぼめる花の風に萎み、満る月の俄に失たるが如く、ころおぼすらめ實とも覺え候はねば、書付たる筆の蹟も覺へず候 (八上野抄)

十七 人の命は山海空市まぬがれがたき事と定て候へども、又定

業亦能轉の經文もあり、又天台の御釋にも定業をのぶる釋もあり (八上野抄)

十八 人間に生をうけたる者、上下につけて患ひなき人はなけれども、時にあたり人に随つてなげきしなじな也、譬ば病の習ひは何れの病も重くなりぬれば、是に過たる病なしと思ふが如し、主のわかれ、親のわかれ、夫婦のわかれ、何れかたなるべきなれども、主は又佗の主も有ぬべし、夫妻は又かほりぬれば、心をやすむる事もありなん、親子の別れこそ、月日のへだつるままに彌よ歎き深かりぬべく見え候へ、親子の別れにも、親は行て子のとどまるは、同じ無常なれども、理りにもや、老たる母は留りて若き子の先に立つは、情けなき事なれば、神も佛もうらめしや、何なれば、親に子をかへさせ給



ひて先には立させ給はずして、とめをかせ給ひて歎かさせ  
 給らんと心うし心なき畜生すら子のわかれば忍びがたし  
 竹林精舎の金鳥はかいこの爲に身をやき鹿野苑の鹿は胎  
 内の子をおしみて王の前にまいれり何に況や心有る人に  
 於ておやされば王陵が母は子の爲になつきをくだき神堯  
 皇帝の後は胎内の太子の爲に御腹を破らせ給ひき此等を  
 思ひつづけさせ給はんには火にも入り頭をもわりて我が  
 子の形を見るべきならば惜からずとこそおぼすらめと思  
 ひやられて涙もとどまらず

十九 第五に人道とは報恩經に曰く三歸五戒は人に生ず

(三光日房抄)

二十 聲聞緣覺はこの表色の身と無表色の戒体を苦空無常無我

(四果抄)

と觀じて見惑を斷ずれば永く四惡趣を離る、又重て此觀を  
 思惟して思惑を斷じ三界の生死を出づ妙樂の釋に云く見  
 惑を破るが故に四惡趣を離る、思惑を破るが故に三界の生  
 を離る文此二乘は法華已前の經には灰身滅智の者永不成  
 佛と嫌はれしなり、灰身と申すは十八界の内十界半の色法  
 を斷ずるなり、滅智と申すは七身界半を滅するなり、此小乘  
 經の習は三界より外に淨土ありと云はず故に外に生處な  
 し、小乗の菩薩未だ見思を斷せず故に凡夫の如し佛も見思  
 の惑を斷盡して入滅すと習ふが故に菩薩佛は凡夫二乗の  
 所攝なり

(三十九戒林抄)

廿一 譬ば是れ水の全體寒じて大小の氷となるが如し、仍て地獄  
 の身と云て、洞然猛火の中の盛なる焰となるも、乃至佛界の

體と云て、色相莊嚴の身となるも、只是一心の所作也。之に依て悪を起せば三悪の身を感じ、菩提心を發せば佛菩薩の身を感ずる也。是を以て一心の業感の氷にとちられて、十界とは別れたる也。

(外 總在一念抄)

廿二

釋迦如來五百塵點劫の當初凡夫にて御坐せし時我身地水火風空なりと即座に悟りを開き、後に化他の爲めに世々番々に出世成道し在處處々に入相作佛す。

(外 總勸文抄)

廿三

天崩るれば我身も崩るべし、地裂けば我身も裂くべし、地水火風滅亡せば我身も亦滅亡すべし、然るに此の五大種は過去現在未來の三世は替ると雖も五大種は替ること無し、正法と像法と末法との三義殊なりと雖も五大種は是れ一にして盛衰轉變なし。

(外 總勸文抄)

第二章 理 具

一

唯佛と佛とのみ乃し能く諸法の實相を究盡し給へり所謂諸法の如是相、如是性、如是体、如是力、如是作、如是因、如是縁、如是果、如是報、如是本末究竟等なり。

(方便品)

二

衆生をして佛知見を開かしめ清淨なることを得せしめん

(方便品)

三

愚なる學者法華已前には二乘計色心を滅する故に、得道を成せず、菩薩凡夫は得道を成すべしと思へり、爾らざる事也。十界等しく具する故に妙法也、さるにては十界に亘つて二乘菩薩凡夫を具足せり、故に二乘を成佛せずと云は、凡夫菩薩も成佛せずと云事也。

(三十九 成體抄)

四 十界互具を知らずんば六道流轉の分斷の生死を出離して  
 變易の土に生ずべきや(中略)十界互具とは法華の淵底この  
 宗の冲微なり

(并四十法抄)

五 十界とは所謂一には地獄二には餓鬼三には畜生四には修  
 羅五には人六には天七には聲聞八には緣覺九には菩薩十  
 には佛界なり此十界は衆生の一念の心より出生す是を隨  
 緣眞如と云ふ亦變造の十界なり本より心性本有の十界に  
 して常住不變なるを不變眞如と云ふなり此眞如は心と性  
 と相即して有り不思議の心性隨緣眞如緣に從て變造して  
 十界を作り出すと云ふは我等が邪見の心は地獄を感じ、慳  
 貪の心は餓鬼を感じ、愚痴の心は畜生を感じ、怨念の心は修  
 羅を感じ、五戒の心は人を感ず、十善の心は天を感じ、四諦の

六 心は聲聞を感じ、十二因緣の心は緣覺を感じ、六度の心は菩  
 薩を感じ、善惡不二の心は佛を感ず是の如く一つの緣に隨  
 つて其性を引き其報を受くるなり是一心の中に十界ある  
 事を知らず心の外に十界ありと思ふとき十界に迷ふて厭  
 ふ所欣ふところあり九界の生死を廻りて成佛の期を知ら  
 ず然るに今此諸法の十界は但一心の内の差別にして而も  
 無差別不思議なり

(十法華用心抄)

是無明即明と觀ずるを唯識觀と云ふなり、縱ひ唯識觀を成  
 ずといへども終には實相觀の人に成るなり、故に義例に云  
 く妙樂本末相映じ事理不二なりと云へり、本とは實相觀末と  
 は唯識觀事とは唯識觀理とは實相觀なり、此の不思議觀成  
 ずるとき流轉生死一時に斷壞して果位に登るなり、是を事

理体一の不思議の總在一念と云ふなり、此性具を顯して觀音は三十三身を顯し此理具を照して妙音は三十四身を現するものなり、若し然らずんば佛の分身薩埵の化身之を現するに由なし、又此理を得ざるときは胎金兩部の千二百餘尊大日の等流變化身も更に以て心得難し、是等の法門は性具の一念の肝要なり

(十七總在一念抄)

摩訶止觀第五に云く夫れ一心に十法界を具す、一法界に又十法界を具すれば百法界なり、一界に三十種の世間を具すれば百法界に即ち三千種の世間を具す、此三千一念の心にあり、若し心なくんば已みなん介爾も心あれば即ち三千を具す、乃至所以に稱して不可思議境と爲す心此にあり

(八觀心本釋抄)

八

此一念三千を天台釋して云く夫一心に十法界を具すれば一法界に又十法界を具して百法界なり、一界に三十種の世間を具すれば百法界は即ち三千種の世間を具す、此三千は一念の心にあり、若し心無れば已みぬ介爾も心あれば即ち三千を具すと云云介爾とは妙樂釋して云く細念を謂ふなり云云意はわづかにと云ふなり、不思議を以て云ふ時は一心の全体十界三千と成る、故に取別つべき物にもあらず、表裏も之なし、一心即三千三千即一心なり、譬へば不覺の人は氷の外に氷ある様に是を思ふ能く、心得る人は氷即水なり、故に一念と三千と差別なく、一法と心得べし、依て天台釋して云く只心は一切法、一切法是心なり、故に縦に非ず横に非ず、一に非ず異に非ず、玄妙深絶なり、識の識る所にあらず、言

の言ふ所にあらず所以に稱して不可思議境と爲す意茲にあり云云故に一念一念にあらず即三千なり三千三千にあらず即一念念に依て事理体一修性不二の法門なり此一念三千の不思議は國土世間に三千を具するが故に草木瓦石も皆本有の三千を具して圓滿の覺体なり然れば即ち我等も三千を具するが故に本有の佛体なり仍て無間地獄の衆生も三千を具し妙覺の如來と一体にして差別なきなり是を以て提婆が三逆の炎忽ちに天王如來の記を蒙る地獄すら尙爾なり何に況や餘の九界をや心智都て滅せる二乘すら尙成佛す何に況や餘の八界をや故に十界の草木等も一一に本有の三千の佛体にして惡心惡法とて捨つべきもの之れなく善心善法とて取るべきものこれなし故に今

の經には此理を説き顯すが故に妙法蓮華經とは題するなり

九

問ふ妙法蓮華經とは其体何物ぞや答ふ十界の依正即妙法蓮華の當体なり問ふ若し爾らば我等が如き一切衆生も妙法の全体なりと云はるべき歟答ふ勿論なり經に云く所謂諸法乃至本末究竟等云云妙樂大師云く實相は必ず諸法諸法は必ず十如十如は必ず十界十界は必ず身土と天台云く十如十界三千の諸法は今經の正体なるのみ云云南岳大師云く云何なるを名けて妙法蓮華經と爲すや答ふ妙とは衆生妙なるが故に法とは即ち是れ衆生法なるが故に云云又天台釋して云く衆生法妙と云云問ふ一切衆生の當体即妙法の全体ならば地獄乃至九界の業因果果も皆是れ妙法の

(外總在一念抄)

体なるか、答ふ、法性の妙理には染淨の二法あり、染法は蒸じて迷と成り、淨法は蒸じて悟と成る、悟は即ち佛界なり、迷は即ち衆生なり、此迷悟の二法二なりと雖も、然も法性眞如の一理なり

(三當体義抄)

十

地獄界に餘の九界を具し、乃至佛界に又餘の九界を具す、是の如く十界互に具して十界即百界と成なり、此百界の一界に各各十如はあるが故に百界は千如と成るなり、此千如是を衆生世間にも具し、五陰世間にも具し、國土世間にも具せるが故に千如は即ち三千となれり、此三千世間の法門は我等が最初の一念に具足して全く闕減なし、此一念即色身となる故に此身は全く三千具足の体なり、是を一念三千の法門と云ふなり、之に依て地獄界とて恐るべきにあらず、

十一

佛界とて外に尊むべきにあらず、此一身に具して事理圓融せり、全く餘念なく不動寂靜の一念に住せよ、上に云ふところの法門是を觀するを實相觀と云ふなり、(十七總在一念抄) 又能き釋には、籤の六に云く、三千理に在れば同じく無明と名け、三千果成すれば威く常樂と稱し、三千改むること無ければ無明即明、三千竝に常なれば俱体俱用なり、又此の釋分明なり、問ふ一切衆生皆悉く妙法蓮華の當体ならば我等が如き愚癡闇鈍の凡夫も即妙法の當体なりや、答ふ當世の諸人之れ多しと雖も二人を出て、謂ゆる權教の人實教の人なり、而も權教方便の念佛等を信ずる人は妙法蓮華の當体と云はるべからず、實教の法華經を信ずる人即當体の蓮華眞如の妙体是なり、涅槃經に云く、一切衆生大乘を信ずる故

に大乘の衆生と名くと

(二十三 當体義抄)

十二 但し斷諸法中惡の經文を會すべきなり、彼は法華經に爾前の經文を載するなり、往て之を見よ、經文分明に十界互具之を説く、所謂欲令衆生開佛知見等云云、天台此の經文を承て云く、若し衆生に佛の知見なくんば、何ぞ開を論ずる所あらん、當に知るべし、佛の知見衆生に蓋在することを云云、章安大師の云く、衆生に若し佛の知見なくんば、何ぞ開悟する所あらん、若し貧女に寶藏なくんば、何ぞ示す所あらんと

(觀心本尊抄)

十三

佛法の中に内薰外護と申す大事ありて、宗論にて候、法華經には我深く汝等を敬ふ、涅槃經には一切衆生悉く佛性有り、馬鳴菩薩の起信論には眞如の法常に薰習するを以ての故

に妄心即滅して法身顯現す、彌勒菩薩の瑜伽論には隠れたる事の顯れたる徳と成り候と見えたる也

(十 樂天抄)

十四

外道が五通を得て能く山を傾け海を竭すとも神通なき阿舍經の凡夫に及ばず、羅漢を得て六通を現する二乗は華嚴方等般若の凡夫に及ばず、華嚴方等般若の等覺の菩薩も法華經の名字觀行の凡夫に及ばず、設ひ神通智慧ありと雖も權教の善知識を用ゆべからず、我等常沒一闍提の凡夫法華經を信せんと欲するは佛性を顯さんが爲めの先表なり、故に妙樂大師の云く、内薰に非ざるよりは、何ぞ能く悟を生ぜん、故に知ぬ悟を生ずる力は眞如に在り、眞如の内薰を外護と爲すなり、已上

(十 守護國家論)

第三章 事具

一 然るに善男子我れ實に成佛してより已來無量無邊百千萬億那由佗劫なり

(壽量品)

二 其の身淨さが故に三千大千世界の衆生の生時死時上下好醜善處惡處に生ずる悉く中に於て現せん及び鐵圍山大鐵圍山彌樓山摩訶彌樓山等の諸山王及び其の中の衆生悉く中に於て現せん下阿鼻地獄に至り上有頂に至る所有及び衆生悉く中に於て現せん若し聲聞辟支佛菩薩諸佛の説法皆身中に於て其の色像を現せん

(法師功德品)

(妙音品)

三 是の如く種々に度すべき所の者に随つて爲に形を現す

四 其の三昧を現一切色身と名く (全 上)

五 生死とは我等が苦果の依身なり所謂五陰十二入十八界なり煩惱とは見思塵沙無明の三惑なり結業とは五逆十惡四重等なり法身とは法身如來般若とは報身如來解脱とは應身如來なり我等衆生無始曠劫より已來此の三道を具足し今法華經に値て三道即三徳となるなり難じて云く火より水出でず石より艸生せず惡因惡果を感じ善因善報を生ず佛敎の定れる習なり而に我等其の根本を尋ね究むれば父母の精血赤白二滯和合して一身と爲る惡の根本不淨の源なり設ひ大海を傾けて之を洗へども清淨なるべからず又此の苦果の依身其の根本を探り見れば貪瞋癡の三毒より出るなり此の煩惱苦果の二道に依て業を構ふ此の業道即



是れ結縛の法なり譬へば籠に入る鳥の如し如何して此の三道を以て三佛因と稱するや譬へ糞を集めて梅檀を遣れども終に香しからざるが如し答ふ汝が難大に道理なり我れ此事を辨へず但し付法藏第十三天台大師の高祖龍樹菩薩妙法の妙の一字を釋して譬は大藥師の能く毒を以て藥と爲すが如し等云云毒と云ふは何物ぞ我等が煩惱業苦の三道なり藥とは何物ぞ法身般若解脱なり能く毒を以て藥と爲すとは何物ぞ三道を變じて三徳と爲すのみ天台云く妙をば不可思議と名く等と

六

此經には二十の大事あり就中五百塵點顯本の壽量に何なる事を説給へるとか人人の思召し候我等が如き凡夫無始已來生死の苦底に沈淪して佛道の彼岸を夢にも知らざり

し衆生界を無作本覺の三身と成し實に一念三千の極理を

七

又云く問て云く佛何れの經の中に眼等の諸根を説て名て如來と爲るや答へて云く大強精進經の中に衆生と如來と同じく共に一法身にして清淨妙無比なるを妙法蓮華經と稱す文陀經にありと雖も下文顯れ已れば通じて引用することを得るなり大強精進經の同共の二字の習ひ相傳なり法華經に同共して信ずる者妙經の体なり不同共の念佛者等は既に佛性法身如來に背く故に妙經の体に非ず所詮妙法蓮華の當体とは法華經を信ずる日蓮が弟子檀那等の父母所生の肉身是なり正直に方便を捨て、但法華經を信じて南無妙法蓮華經と唱ふる人の煩惱業苦の三道は法身

八

般若解脱の三徳と轉じて三觀三諦即一心に顯れ其人の所  
 住の處は常寂光土なり能居所居身土色心俱体俱用無作三  
 身の本門壽量の常体の蓮華佛とは日蓮が弟子檀那等の中  
 の事なり是れ即ち法華の當体自在神力の顯す所の功能な  
 り敢て之を疑ふべからず之を疑ふべからず(當体義抄)  
 十界互具之を立るは石中の火木中の信難けれども縁  
 に値ふて出生すれば之を信ず人界所具の佛界は水中の火  
 火中の水なり最も甚だ信難し然りと雖も龍火は水より  
 出て龍水は火より生ず心得られざれども現證あれば之を  
 用ゆ既に人界の八界之を信ず佛界何ぞ之を用ひざらん堯  
 舜等の聖人の如きは萬民に於て偏頗無し人界にして佛界  
 の一分なり不輕菩薩は所見の人に於て佛身を見る悉達太

九

子は人界より佛身を成ず此等の現證を以て之を信ずべき  
 (八内觀心本尊抄)  
 なり  
 數佗面を見るに或時は喜び或時は瞋り或は平かに或時は  
 貪り現じ或時は痴現じ或時は諂曲なり瞋るは地獄貪るは  
 餓鬼痴かは畜生諂曲は修羅喜ぶは天平かなるは人なり佗  
 面の色法に於ては六道共に之れ有り四聖は冥伏して現れ  
 ずとも委細に之を尋ねば之れあり問ふて曰く六道に於  
 て分明ならずと雖も粗之を聞くに之を備ふるに似たり四  
 聖は全く見ず如何答へて曰く前には人界の六道之を疑ふ  
 然りと雖も強て之を言て相似の言を出す四聖又爾るべき  
 か試みに道理を添加して萬が一之を宣ん所以に世間の無  
 常眼前にあり豈人界に二乘界なからんや無願の悪人も猶

汝妻子を慈愛す菩薩界の一分なり但し佛界計り現に難し  
 九界を具するを以て強て之を信じ疑惑せしむること勿れ  
 法華經の文に人界を説て云く衆生をして佛知見を開かし  
 めんと欲す涅槃經に云く大乘を學する者は肉眼ありと雖  
 も名けて佛眼と爲す等云云末代の凡夫出生して法華經を  
 信ずるは人界に佛界を具足するなり  
 (入觀心本釋抄)

第四章 結 歸

- 一 我も亦これ世の父諸の苦患を救ふ者なり (毒量品)
- 二 我が如く等しくして異なること無らしめんと欲しき (方便品)
- 三 如來も亦復是の如く一切衆生の父なり (譬喻品)

- 四 今此の三界は皆是れ我有なり其の中の衆生は悉く是れ吾子なり而も此の處は諸の患難多し唯我れ一人のみ能く救ひ護ることをなす (譬喻品)
- 五 此れ實に我子我れ實に其の父なり  
 如來は常に我等を説いて子となす (信解品)
- 六 我等昔しより來た眞に是れ佛子なり  
 無價の寶珠を以て汝が衣の裏に繋く今故は現在せり而るに汝知らずして勤苦し憂惱して以て自活を求む甚これ癡なり (受記品)
- 七 内衣の裏に無價の寶珠あることを覺らず  
 若は比丘比丘尼優婆塞優婆夷を皆悉く禮拜し讚歎して而も是の言を作さく我れ深く汝等を敬ふて敢て輕慢せず所

以は何ん、汝等皆菩薩の道を行して當に作佛すべし

(不輕品)

八 今汝等が爲に最實事を説かん、諸の聲聞衆は皆滅度せるに

(藥草品)

九 一代之肝心は法華經、法華經の修行の肝心は不輕品にて候

也、不輕菩薩の人を敬ひしは如何なる事う、教主釋尊の出世

の本懐人の振舞にて候けるう、穴賢、穴賢賢さを人と云ひ慕

無を畜と云ふ云云 (十九崇峻天皇抄)

十 我等衆生は五百塵點劫より已來教主釋尊の愛子なり

(九法華取要抄)

十一 我即是父の柔輦の御姿見奉るべきをも未だ見奉らず、是れ

誠に袂をくだし胸をこがす嘆きならざらんや

十二 佛は人天の主一切衆生の父母なり、而も開導の師なり(中畧)

(廿一持法華問答抄)

十三 實を以て勸へ申さば、二乗作佛なきならば、九界の衆生の成

(十六新編抄)

佛あるべからず、法華經の心は法爾のこととはりとして、一切

衆生に十界を具足せり、譬へは一人一人は必ず四大を以てつ

くれり、一大かけなば人にあらじ、一切衆生のみならず、十界

の依正の二法非情の艸木一微塵にいたるまで皆十界を具

足せり、二乗界佛に成らずば餘界の中、二乗界佛になるべ

からず、又餘界の中、二乗界佛にならずば餘界の八界佛に

なるべからず、譬へば父母ともに持たる者、兄弟九人あらん

が二人凡下の者と定められるば、餘の七人も必ず凡下の者

となるべし、佛と經とは父母の如し、九界の衆生は實子なり、聲聞緣覺の二人永不成佛の者となるならば、菩薩六凡の七人あに得道をゆるさるべきや、今此三界皆是我有、其中衆生悉是吾子、乃至唯我一人能爲救護の文をもつて知べし。

(外小大分別抄)

十四 法華經に云く、大海の底に龜あり、三千年に一度海上にあがる、梅檀の浮木の穴に行値ふてやすむべし、而るに此の龜一目也、而も解目にて西の物を東と見、東の物を西と見る也、末代惡世に生れて、法華經并に南無妙法蓮華經の穴に身を入る、男女に譬へ給へり、何なる過去の縁にておはすれば、此の人を訪はんと思食す、御心は付せ給ひけるやらん、法華經を見まいらせ候へば、釋迦佛の其人の御身に入せ給ひてか

ゝる心は付くべしと説て候、譬へばなにとも思はぬ人の酒を飲て酔ぬればあらぬ心出來り人に物をとらせばやなんを思ふ心出來る、此は一生慳貪にて、餓鬼道に墮べきを其人の酒の縁に菩薩の入替らせ給ふ也、濁水に珠を入れぬれば水すみ、月に向ひまいらせぬれば人の心あくがる繪にかけ、る鬼には心なけれどもおそろし、とわりを繪にかけば我夫をばとらぬどもそねまし、錦のしとねに蛇をおれるは著すべしとも思はず、身のあつさにあたたかなる風厭はし、人の心此の如し。

(十三 妙法尼抄)

十五 法華經第五の卷安樂行品に云く、文殊師利此の法華經は無量の國中に於て乃至名字をも聞くことを得べからず、云此の文の心は我等衆生の三界六道に輪回せる事、或は天に

生れ、或は人に生れ、或は地獄に生れ、或は餓鬼畜生等に生れ  
 無量の國に生を受け無邊の苦樂に値しかども、一度も法華  
 經の國には生れず、適々生れたりしかども、南無妙法蓮華經  
 と唱ふる事は夢にもなし、人の申すをも聞かず、佛髻を取せ  
 給ふに、一眼の龜の浮木の孔に値がたきに譬へ給へり、心は  
 大海の中に、八萬由旬の底に龜と申す大魚あり、手足もなく  
 ひれ尾もなし、腹の熱き事は鐵をやけるが如し、背の甲のつ  
 めたき事は雪山にも過たり、此魚の晝夜朝暮のねがひ時  
 剋剋の口ずさみにはあはれ腹をひやし、甲をあたくめんと  
 思ひき、赤梅檀と申す木をば聖木と名く、人の中の聖人の如  
 し、餘の一切の木をば凡木と申す、愚人の如し、此の梅檀の木  
 は此の魚の腹をひやす木也、あはれ此の木に乗て腹をば穴

に入れてひやし、甲をば天の日にあて、あたくめばやと申  
 す也、自然の理として、三千年と申すに一度うかぶ龜也、而れ  
 ども此の木に値事難し、大海は廣し、龜は小し、浮木はまれ也、  
 縦ひ餘の浮木には行合ふも、梅檀の浮木にはあはず、縦ひ梅  
 檀にはあふとも、龜の腹をゑりはめたる様にかい分に應じ  
 たる、浮木の穴に値ひ難し、縦ひ穴有とも、廣くして我が身落  
 入りなば、甲をあたくめ難し、誰か又取上べき又穴せば、くし  
 て腹をおとし入れずは、波にあらひ落され、大海にしづみな  
 ん、縦ひ不思議として、梅檀の浮木の穴に適行合たれども、我  
 一眼のひがめる故に、浮木西に流るれば、東と見る故に、急ぎ  
 乘らんと思ひておよげば、彌彌遠ざかる、東に流るを西と見  
 る、南北も亦復是の如し、浮木には遠ざかれども、近づく事な

し是の如く無量無邊劫にも、一眼の龜の浮木の穴にあひ難  
 き事を佛説給へり此譬を以て法華經にあひ難く縦ひあふ  
 とも唱へ難き題目の妙法の穴にあひ難き事を心うべき也  
 大海とは生死の苦海也龜をば我等衆生に譬へ手足のなき  
 をば善根の我等が身にそなはらざるに譬へ腹の熱をば我  
 等が瞋恚の入熱地獄に譬へ背の甲の寒さをば貪欲の入寒  
 地獄に譬へ三千年大海の底に有をば我等が三惡道に墮て  
 浮び難きに譬へ三千年に一度浮ぶをば三惡道より無量劫  
 に一度人間に生れて釋迦佛の出世に値がたさに譬へ餘の  
 松の木檜の木の浮木には値やすく梅檀に値がたさをば除  
 の一切經には値やすく法華經には値がたさに譬へたり縱  
 ひ梅檀には値とも相應したる穴に値がたさをば縦ひ法華

には値とも肝要たる南無妙法蓮華經の名字の題目にあひ  
 奉る事のかたさに譬へ東を西と見北を南と見る事は我れ  
 等衆生かしがほに智慧有る由をして勝を劣と思ひ劣を  
 勝と思ふ得益なき法をば得益有りとし機に叶はざる法を  
 ば叶へりと見機に叶へる法をば叶はずと云ふ眞言は勝り  
 法華は劣り念佛は機に叶ひ法華經は叶はずと見るに譬ふ  
 る也

(附 松野尼抄)

十六 大地の上に鍼を立て大梵天宮より糸を下してあやまたず  
 糸を鍼の穴に入るゝ事は有とも我等が人間に生るゝ事は  
 難く又億億萬劫不可思議劫は過るとも如來の聖教に値ひ  
 奉る事難し而るに受け難き人間に生をうけ値ひ難き聖教  
 に値ひ奉る設ひ聖教に値ふと云ふとも惡知識に値ふなら

ば三惡道に墮ん事疑ひ有るべからず師墮れば弟子墮つ弟子墮れば檀那墮と云ふ文有るが故に今幸に一乘の行者に値ひ奉り皮をはぎ肉を切り千歳仕へされども恣に一念三千十界十如一實中道皆成佛道の妙法を學ぶ實に過去の宿善拙ふして末法流布の世に生れ値はざれば未來永永を過ぐとも解脫の道難かる可し又世間の人の有様を見るに口には信心深き事を云へども實に神にそむる人は千萬人一人もなし涅槃經に云く佛法を信せずして惡道に墮つる者は大地の土の如く佛法を信じて佛に成らん者は爪の上の土の如しと説き給へるも理也

(人身延記)

十七 佛は五重の煩惱の雲晴れ五眼の眼に曇り無し三千世界無量世界過去未來掌の中に照知照見せさせ給ひしか後五百

歲南閻浮提の一切の女人法華經の一字一點も信行せば本時同居の安樂世界に往生すべしと知見し給ひける事の貴く憑敷事云ふ計なし女人の御身として漢の李夫人楊貴妃王昭君小野小町泉式部と生れさせ給ひたらんよりも當世の女人は喜ばしかるべき事也彼等は寵愛の時にはめづらしかりしかども一期は夢の如し當時は何れの惡道にか侍らん彼の時は世はあがりたりしかども或は佛法已前の女人或は佛法の最中なれども後五百歳の已前也佛の指し給はざる時なれば覺束なし當世一切の女人は佛の記し置給ふ後五百歲二千餘年に當つて是れ實の女人成佛の時也

(女人往生抄)

十八 像法末法の始めよりの女人は殊に法器にあらず諸經の力



及ぶべからず、但法華經計り助け給ふべし故に次上の文に  
 十喻を擧るに、川流江河の中には大海第一也、一切の山の中  
 には須彌山第一也、一切の星の中には月天子第一也、衆星と  
 月との中には日輪第一也、此の如き千萬億の已今當の諸經  
 を擧て江河諸山衆星等に喩へ、法華經をば大海須彌日月等  
 に喩へたり、此の如く讚已つて殊に後五百歳の女人に此經  
 を授け給ひぬるは、五濁に入り正像二千年過て、末法の始め  
 の女人は殊に詭曲なるべき故に、諸經の力及ぶべからず、諸  
 佛の力も及ぶべからず、但法華經の力のみ及び給ふべき故  
 に、後五百歳の女人とは説かれたる也。  
 (十九 女人往生抄)

十九 若童生れさせ給ひし由承り候、目出たく覺へ候、殊に今日は  
 八日にて彼と云ひ此と云ひ所願しはの指すが如く春の野

に華の開けるが如し、然れば急ぎ急ぎ名をつけ奉る月滿御  
 前と申すべし。  
 (他月滿御書)

二十 女子は門をひらく、男子は家をつぐ、日本國を知ても子なく  
 は誰にかつがすべき、財を大千界にみてても子なくば誰に  
 かゆづるべき、されば外典三千餘卷には、子ある人を長者と  
 云ふ、内典五千餘卷には、子なき人を貧人と云ふ、女子一人男  
 子一人譬へば、天には日月の如く、地には西東にかたせり、  
 鳥の二つのはね、車の二つの輪なり、さればこの男子をば、日  
 若御前と申させ給へ、委しくは又申すべし、恐恐謹言。  
 (十四條抄)

# 第六篇 法 界

(發心篇第七章推理の下對照せよ)

## 第一章 通 說

一 若し衆生ありて、内に智性あつて、佛世尊に従ふて法を聞いて信受じ、慇懃に精進して速に三界を出でんと欲して、自ら涅槃を求むる是を聲聞乘と名く、彼の諸子の羊車を求むるをもつて火宅を出づるが如し、若し衆生ありて佛世尊に従ふて法を聞いて信受し、慇懃に精進して自然慧を求め、獨り善寂を樂ひ深く諸法の因縁を知る是を辟支佛と名く、彼の諸子の鹿車を求むるをもつて火宅を出づるが如し、若し衆生ありて、佛世尊に従ふて法を聞いて信受し、勤修し精進し

て一切智、佛智、自然智、無師智、如來の知見、力無所畏を求め、無量の衆生を愍念安樂し、天人を利益し、一切を度脱する是を大乘と名く、菩薩此の乘を求むるが故に名けて摩訶薩となす、彼の諸子の牛車を求むるをもつて火宅を出づるが如し

(譬喻品)

二 夫れ法華經已前の實相、其の數一にあらず、先づ外道の内長爪實相、内道の内小乘、乃至爾前の四教、皆所詮の理は實相なり、何ぞ必らずしも已説の觀經に載する所の實相のみ法華經に同と意得べきか

(十法華淨土問答抄)

三 佛の心法妙と衆生の心法妙と此の二妙を取て已心に攝するが故に心の外に法なき也、已心と心性と、心體との三は己身の本覺の三身如來也、是を經に説て如是相、如是身、如是性、身

四

如來如是體如來也此を三如是と云ふ此の三如是の本覺の  
 如來は十方世界を身體となし十方世界を心性となし十方  
 法界を相好となす是の故に我身は本覺の三身如來の身體  
 なり法界に周徧せる一佛の徳用なれば一切の法は皆是佛  
 法なりと説き給ひし時其座席に列なりし諸の四衆八部も  
 畜生も外道等も一人も漏れず皆悉く妄想の僻目僻思ひ立  
 所に散止して本覺の寤に還て皆佛道を成ず(十種勸文抄)  
 又佛になる道は華嚴の唯心法界三論の八不法相の唯識眞  
 言の五輪觀等も實には叶ふべしともみへず但天台の一念  
 三千こそ佛になるべき道とみゆれ此の一念三千も我等一  
 分の慧解もなし而れども一代經々の中には此經計り一念  
 三千の玉をいだけり餘經の理は玉に似たる黃石なり沙を

五

しぼるに油なし石女に子のなきが如し諸經は智者猶佛に  
 ならず此經は愚人も佛因を種べし(三開目抄)  
 諸の權化の人人の本地は法華經の一實相なれども垂迹の  
 門は無量也所謂薄俱羅尊者は三世に不殺生戒を示し鷲嶺  
 摩羅は生生に殺生を示し舍利弗は外道となり難陀は姪欲  
 を示す此の如く門門の異なる事は昔し凡夫にてありし  
 時は初發得道に是の如く也事を成佛の後化佗に出給ふ  
 時我が得道の門を示し給ふ也妙樂大師云く若し本に従つ  
 て説かば亦是の如く昔し殺等の惡の中に於て能く出離す  
 故に迹中に亦殺を以て利佗の法門と爲す等文今の八幡大  
 菩薩は本地月氏の不妄語の法華經を迹に日本國にして正  
 直の二字に成して賢人の頂に宿ると云云(廿七八幡抄)

第二章 迹 門

- 一 一切の諸法を觀するに空なり、如實相なり、顛倒せず動せず、退せず轉せず、虚空の如くにして、所有の性なし、一切の語言の道斷へ、生ぜず出せず起せず、名なく相なく實に所有なし、無量無邊無碍無障なり、但因縁を以て有り、顛倒より生ず、故に説く常に樂ふて是の如き法相を觀せよと (安樂行品)
- 二 一切の諸法は空にして、所有無し、常住あること無く、亦起滅無し (安樂行品)
- 三 一切の法を觀するに、皆所有無し、猶虚空の如し、堅固あること無し、不生なり、不出なり、不動なり、不退なり、常住にして一相なり (安樂行品)

- 四 如來は是れ一相一味の法なりと知れり、所謂解脫相離相滅相、究竟涅槃常寂滅相にして、終に空に歸す (藥神品)
- 五 其の一法とは、即ち無相なり、是の如き無相は相なく相ならず、相ならず相なし、名けて實相となす (說法品)
- 六 應當に一切の諸法は、自から本來今性相空寂にして、無大無小、無生無滅、非住非動、不進不退、猶虚空の如く、二法有ること無しと觀察すべし (全上)
- 七 或は菩薩の諸法の性は二相あること無く、猶虚空の如しと觀するを見る (序品)
- 八 諸佛兩足尊、法は常に無性にして、佛種は緣より起るを知るしめす、この故に一乘を説き給ふ、是の法は法位に住して、世間の相常住なり (方便品)